

# 那珂遺跡3

—那珂遺跡群第22次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第253集

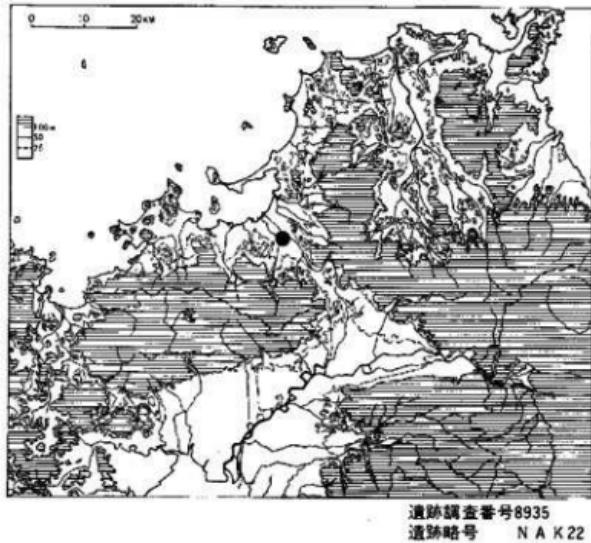
1991

福岡市教育委員会

# 那珂遺跡3

—那珂遺跡群第22次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第253集



1991

福岡市教育委員会



S X04出土軒瓦

## 序

広く玄海灘の海を前面にした福岡市は、その地理的条件を生かし、先史時代より大陸の先進文化を一早く受けいれてきました。この事を物語る過去の遺産は数知れず、未だ埋もれています。しかし、現在の開発ベースは目を見張るものがあり、こうした遺跡も失ないつつある状況です。福岡市ではこの現状に対し、記録保存の調査を行なってきています。

今回は、那珂遺跡と呼称される弥生時代、古代において、特に重要な遺跡の調査です。報文中に記した瓦は全国でも古い部類のもので、大陸の進んだ建築技術を受容したものと思われます。

最後になりましたが、調査に際して、御協力いただいた工事関係者、周辺の住民の方々に感謝申し上げるとともに、本書が文化財の保護と活用に利用されれば幸いです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成2年7月7日から同年8月22日かけて実施した那珂遺跡群第22次調査の報告書である。
2. 本書の執筆は荒牧が行なった。
3. 本書に掲載された遺物は荒牧が実測を行い、浄書、写真撮影等を横山、力武、田中氏にお願いした。
4. 遺構の実測、写真撮影等は荒牧、大橋隆司、池田が行なった。
5. 本書に使用した方位は磁北である。
6. 発掘調査によって得られた記載類、出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。広く活用される事を願います。

遺跡調査番号	8935		遺跡略号	N A K - 22	
調査地地籍	福岡市博多区竹下5丁目130番地		分仙地図番号	038-A-3	
開発面積	776.29m <sup>2</sup>	調査対象面積	751.6m <sup>2</sup>	調査実施面積	516m <sup>2</sup>
調査期間	890707～890822		事前査査番号		

# 本文目次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査体制.....	1
II.調査の方法.....	1
1. 表土剥ぎ.....	1
2. 土層.....	1
III.位置と環境.....	2
IV.調査の記録.....	4
1) 土壌(SK).....	4
SK-07.....	4
SK-09.....	4
SK-10.....	4・5
2) 性格不明土壌(SX).....	5
SX-01.....	5・6
SX-04.....	6
SX-02.....	19
3) 溝(SD).....	20
SD01・32.....	20
SD20・21.....	22
4) 柱穴・遺構検出時出土遺物.....	22

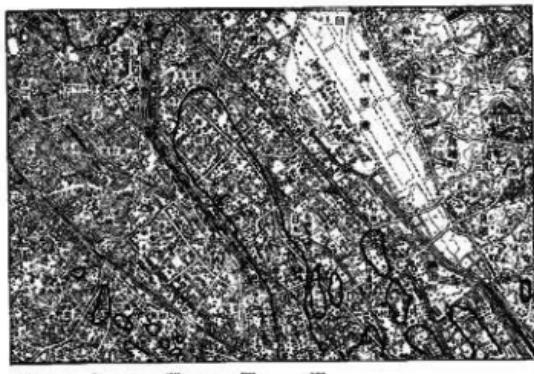
## 挿図目次

Fig. 1 周辺測量図(1/40).....	2
Fig. 2 新河造跡群全体図(1/10000).....	3
Fig. 3 SK07・09・10実測図(1/40).....	4
Fig. 4 SK09出土遺物実測図(1/3).....	4
Fig. 5 SK08・12実測図(1/30).....	5
Fig. 6 SX01出土遺物実測図(1/3).....	6
Fig. 7 SX01・SX04実測図(1/60).....	7
Fig. 8 SX04出土須恵器実測図1(1/3).....	9
Fig. 9 SX04出土須恵器実測図2(1/3).....	10
Fig. 10 SX04出土須恵器実測図3(1/3).....	11
Fig. 11 SX04出土須恵器実測図4(1/6).....	12
Fig. 12 SX04出土陣器実測図(1/4).....	13
Fig. 13 SX04出土須恵器ヘラ記号拓影.....	14
Fig. 14 SX04出土瓦実測図1(1/3).....	折り込み
Fig. 15 SX04出土瓦実測図2(1/3).....	折り込み
Fig. 16 SX04出土瓦実測図3(1/3).....	17
Fig. 17 SX04出土瓦実測図4(1/3).....	18
Fig. 18 SX02実測図(1/40).....	19
Fig. 19 SX02出土瓦実測図(1/6).....	19
Fig. 20 SK14実測図(1/40).....	20
Fig. 21 SK13・14出土遺物実測図(1/3).....	20
Fig. 22 SD32出土遺物実測図(1/4).....	20

Fig. 23 SD01出土遺物実測図 (1/3) .....	21	Fig. 26 表採遺物実測図 (1/1, 1/3) .....	23
Fig. 24 SD20・21出土土器実測図 (1/3) .....	22	付図 遺構全体図 (1/100)	
Fig. 25 SD20・21出土紡錘車 (1/3) .....	22		

### 図版目次

P L 1	調査区北半全景 (南から)	P L 9 (上)	S X04遺物出土状況(3) (南から)
P L 2 (上)	調査区南半全景 (北から)	P L 9 (下)	S X04完掘状況 (西から)
P L 2 (下)	調査区南半全景 (北東から)	P L 10	S K14完掘状況 (南から)
P L 3 (上)	S K07完掘状況 (東から)	P L 11	S X04出土須恵器(1)
P L 3 (下)	S K08, 09完掘状況 (南から)	P L 12	S X04出土須恵器(2)
P L 4 (上)	S K06完掘状況 (南から)	P L 13	S X04出土須恵器(3)
P L 4 (下)	S K12完掘状況 (西から)	P L 14	S X04出土土師器
P L 5 (上)	S K12完掘状況 (西から)	P L 15	S X04出土遺物ヘラ記号(1)
P L 5 (下)	S K12馬骨体軸検出状況 (西から)	P L 16	S X04出土遺物ヘラ記号(2)
P L 6 (上)	S K12馬四肢骨検出状況 (西から)	P L 17	S K04出土丸瓦
P L 6 (下)	S K12馬下顎骨検出状況 (北から)	P L 18	S X04出土平瓦 (丸瓦、平瓦)
P L 7	S X04全景 (西から)	P L 19	S X04出土瓦
P L 8 (上)	S X04遺物出土状況(1) (北から)	P L 20	都司22次出土遺物
P L 8 (下)	S X04遺物出土状況(2) (北から)		



A : 博多遺跡群      D : 諸岡遺跡群  
 B : 比恵・那珂遺跡群      E : 麦野遺跡群  
 C : 板付遺跡      F : 井相田遺跡群  
 遺跡群の範囲は中位段丘面の台地部を示す  
 周辺遺跡分布図 (1/5万)

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

福岡市の住宅街である博多区那珂は、木造個人住宅から高層の集合住宅への建て替えが最近、急速に進行している。今回調査もマンション建設に伴うものである。新栄住宅株式会社の建設計画に対し、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課では試掘調査を平成2年5月30日に実施し、調査の必要を決定した。これを受けて埋蔵文化財課第2係では調査のための協議、条件整備を進め、平成2年7月7日から調査を開始し、同年8月22日に終了した。

## 2. 調査体制

福岡市教育委員会を調査主体とし、文化部埋蔵文化財課で総括、担当した。調査から報告書刊行に至るまで、多くの方々の協力を受けた。記して感謝の意を述べます。

調査協力 高田茂 山部増人 石松晋 仲田忠孝 鳴ヒサ子 山本后代 松浦ウメノ 山下智子 吉住クニ子 二半禮香代子 宮崎ヨシ子 野中雅子 馬場イツ子 野見山恵美子 梶原弥寿広 蒼野シゲ 川上すぎえ 村田トモヨ 中野モト 百田秀之 安部国恵 池見恭子 小西千晶 片野ゆき子 山口英子 田村妙子 その他大学生諸氏にも協力していただいた。

# II 調査の方法

## 1. 表土剥ぎ

調査は重機による調査区北半の表土剥ぎから始まった。廃土を調査区南半に置いた為に2分割の調査となった。調査範囲は建造物予定地の占める範囲で、敷地の東側一部を除外している。調査面積は516m<sup>2</sup>である。

## 2 土層（付図）

現況は標高8.70mの平坦面を有す。遺構検出は調査区全面にわたって古地盤のローム上面で行なった。このレベルまでの堆積土は重機によって剥ぎとった。調査区北壁際付近は盛土（層厚20cm）下の標高8.25mで赤褐色を呈すいわゆる鳥栖ロームに達する。調査区中央から南側の層序は概ね上から明褐色土（層厚20cm）、暗褐色土（層厚25cm）、黒色土（層厚15cm）、灰褐色ロームである。重機による表土剥ぎではこの黒色土上面で一度止め、柱穴等の検出を行なった。しかし、検出できる遺構が少なく、時間的制約があった為、再び重機によってローム上面まで下げる。ローム上面は南側に緩やかに下降し、調査区南西部では標高7.80mを測る。ロームの土色も灰白に近いものとなるが、上層の黒色土に汚濁され褐色を呈す。この黒色土中からは古墳後期の須恵器片が出土した。尚、上層の暗褐色土は中世以降の堆積と考えられる。

### III 位置と環境

玄海灘の海を北面にした福岡平野は背後を背振山塊、二郡山塊で限られる海岸平野である。この福岡平野を北流する那珂川、御笠川の2河川にはさまれた中位段丘面に那珂遺跡は立地する（目次下、周辺遺跡分布図参照）。その範囲は東西約600m、南北約1400mに及ぶ。この南北に細長く伸びた那珂丘陵の周縁部は開析が著しく、入りくんだ地形を呈す。平坦な頂部付近は標高約10mで、台地南際に位置する当調査地点との比高差、約2.20mを測る。

奴國の中心と考えられる弥生時代の遺跡は北へ断続的に細長く延びていく中位段丘面に展開する。南の春日市須玖岡本遺跡とその周辺から、井戸、大橋、諸岡、板付、那珂、比恵遺跡等、北へ弥生時代の集落が営まれる。集落には環溝が検出されつつあり、また青銅器鋳型の出土も多く見受けられ、その繁栄が伺える。

今調査は那珂丘陵南側の第20次、第23次調査で検出された環溝の外側で、散発的な遺物の出土はみるものの、明確な遺構は抱えていない。

弥生時代とともに那珂遺跡は古代においても注目される。第8次、第13次、第23次調査等では古代瓦が出土し、那珂郡衙との関連が考えられつつある。従来、那珂郡衙は東側の沖積部に比定されていたが、地形的にこの台地部が有力視されている。



Fig. 1 周辺測量図 (1/400)

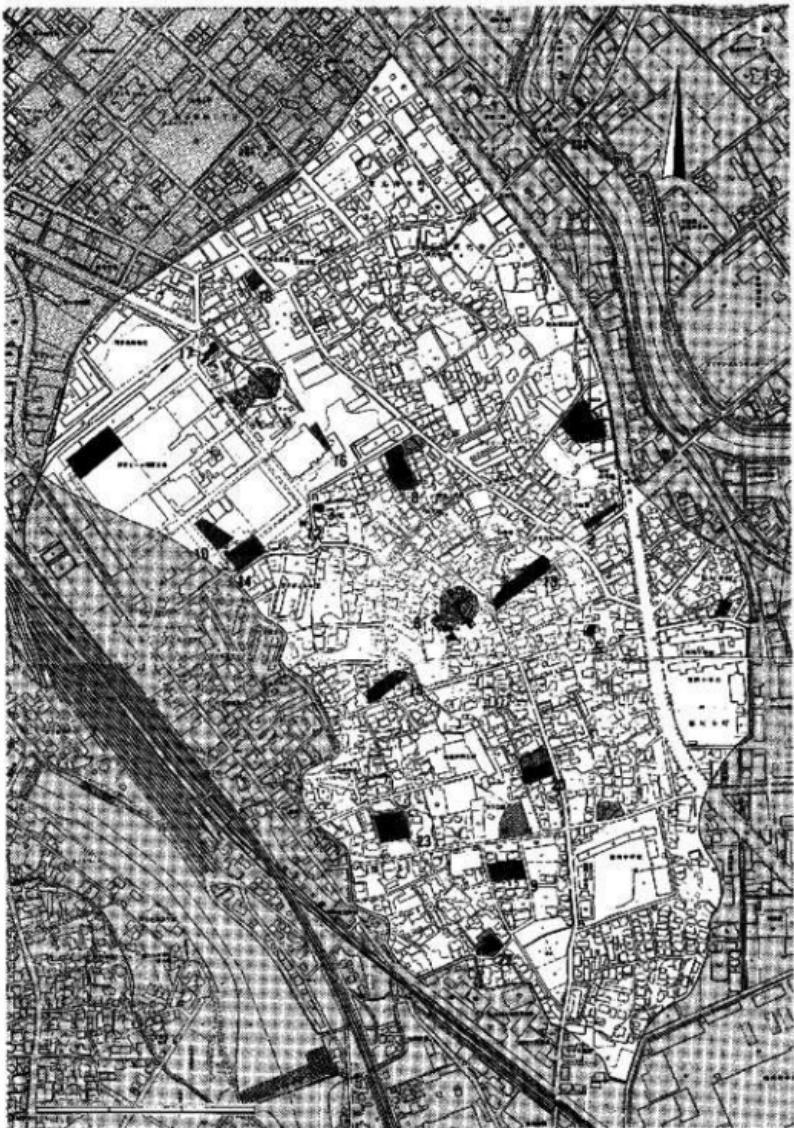


Fig. 2 堀河遺跡群全体図 (1/10,000) 番号は調査次数を示す

## IV 調査の記録

**概要** 検出された遺構は土塙7基、溝3条、近代以降の性格不明土塙5基、柱穴多数である。柱穴を含めた遺構の分布は台地が落ちていく南側にかけて少なくなっていく。

### 1) 土塙 (SK)

#### SK-07 (Fig. 3)

調査区の中央付近で検出した。長軸194cm、南辺67cm、北辺は一部擾乱で壊れているが復元83cmを測る。やや北辺が広くなった隅丸長方形プランを呈す。深さ約50cm、基底部は舟底状である。出土遺物は青磁、玉縁白磁片、糸切底の土師皿の細片を含む。

#### SK-09 (Fig. 3)

調査区中央部で検出した。SK-08に切られる。長軸235cm、西辺84cm、東辺約100cmの楕円に近いプランを呈す。深さは10~15cmで、遺存が悪い。基底面は平坦をなす。図示した土師皿1は口径8.7cm、器高0.8cm、底部は糸切り。他に瓦器塊、青磁、白磁、石鍋片が出土した。



Fig. 4 SK-09出土遺物実測図 (1/3)

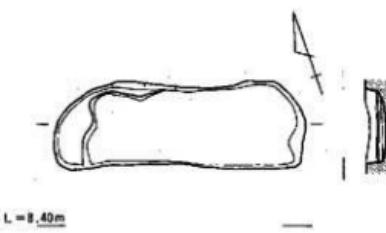
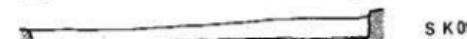
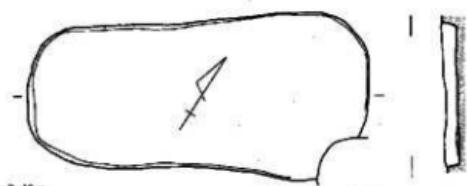
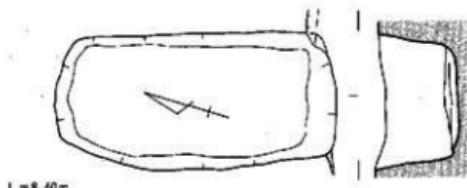


Fig. 3 SK-07; 09; 10実測図 (1/40)

### SK-10 (Fig. 3)

調査区中央東際で検出された。長軸172cm、短軸54cmを測る。歪な方形プランを呈し北辺隅は弧形を有す。深さは6~14cm、基底部は平坦で北側に不明瞭な段を有す。遺物は土師器の極細片が若干出土した。

### SK-08 (Fig. 5)

調査区中央部で検出した鍛冶、炉趾である。SK-09を切る。堀り方は長軸104cm、短軸54cmの隅丸方形プランを呈す。広まった東辺および長辺の約2/3に幅約5cmの焼喰が認められた。埋土には焼土と炭が不連続に流れこむ。基底面近くには焼土と炭、灰が堆積するが西側には広がらない。その焼土を除去した掘り方は舟底状で西側にやや高くなる。出土遺物には土師器、瓦器塊がある。

### SK-12 (Fig. 5)

調査区中央部で検出された。長径155cm、短径108cmの橢円形プランの掘り方に馬1頭を埋葬する。馬骨の遺存は脆弱で、体軸の形状が幸して判る。北側の頭骨は齒と下頬骨が遺存するが他の形状は不明瞭である。体軸は4肢を折りこみ、掘り方一様に埋置する。掘り方基底面は体軸の南側へ緩やかに傾斜する。埋土から須恵器、土師器壺、环片が少量出土。

#### 2) 性格不明土壤 (SX)

円形ないし不規形の大型プランをもつものである。この中、SX-03、22、24、25、34は近代以降のものである。何れも深く、SX-03は深さ270cm以上に及ぶ。この為、時間的制約と危険防止から、これら近代以降のものについては完掘しなかった。

### SX-01 (Fig. 6・7)

調査区北東際で検出された。その大半は調査区外におよぶ。埋土は褐色系でSX-04との切り合は明瞭に判別された。深さは110cmを測る。出土遺物の1は陶器壺鉢である。同一個体と考えられる破片の擱目は7本である。2は砂岩製砥石である。中砥程度のきめ

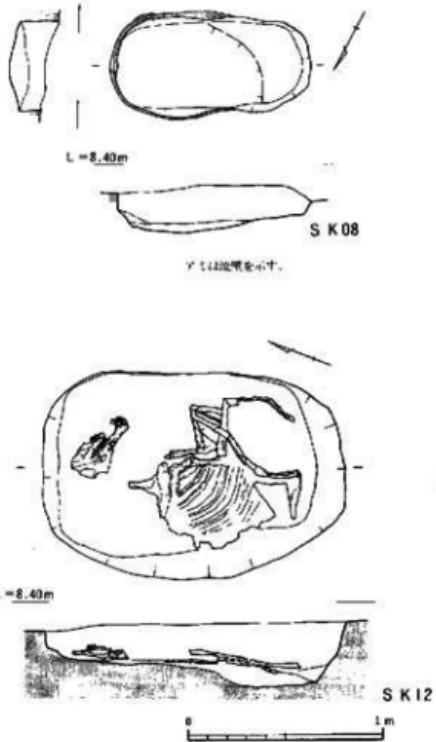


Fig. 5 SK 08, 12実測図 (1/30)

で、器面にススが付着する。

#### S X-04 (Fig. 7)

調査区北東部で検出された。長径約6.60m、短径5.15mの楕円形プランを呈す。南側の一部は擾乱により形状を崩す。埋土は黒褐色系の粘質土で、分層が不明瞭で、レンズ状の自然堆積した層序のみ観察された。基底部は中央部に不整形の段を有し低くなるが、プラン検出及び土層から遺構の切り合は認められない。この中央部に基底より20~30cm浮いた状態で多数の遺物が出土した。遺物はほぼ同一レベルで出土し、大半は破損品で廃棄されたものと考えられるが、大甕2個体、環等完成品ないしそれに近いものもあり、その性格を再考せざるを得ない。

#### 出土遺物 (Fig. 8~17)

##### 須恵器

壺蓋 (4~19) 口径11.4~12.9cm、器高3.4~4.1cmの大きさに収まる。天井部は、中心附近がやや平坦になるものがあるが、概して丸みをもつ。12は器厚が薄く、天井部が極端に平坦となり、他と異なる。19は焼き歪みにより天井部が陥没する。口縁部が直に近く折れる4、11、17、19と外側に開くものとがある。体部外面の回転ヘラ削りは、その1/2未満の範囲で、ナデないし静止ヘラ削りを加えたものがある。天井部内面には不整方向のナデを施す。

高壺蓋 (20~22) 口径は20が13.4cm、21が15.2cm、22が復原で14.1cmを測る。体部は壺蓋とはほぼ同形で、丸みをもつ。21のつまみは中心が若干深む程度であるのに対し、22は宝珠形を呈す。また、22の天井部外面にはカキ目が施されている。

壺身 (23~42) 受部径12.4~14.1cm、立ち上り径10.0~11.6cm、器高3.6~4.8cmの大きさに収まる。底部から体部にかけては、壺蓋同様、丸みのあるカーブを描く。しかし、その度合は異なり、30のように器高が低く、偏平な器形のものから、32、35のようにカーブの大きいものまで含む。立ち上りは33の長めのものがあるが、他は短く内傾する。回転ヘラ削りの範囲は壺蓋と同じく体部1/2より、かなり狭い。

高壺 (43~47) 43は受部径14.1cm、立ち上り径11.5cmを測る。外底部にはカキ目を施し、ヘラ記号を刻む。

44の壺部は口径15.8cm

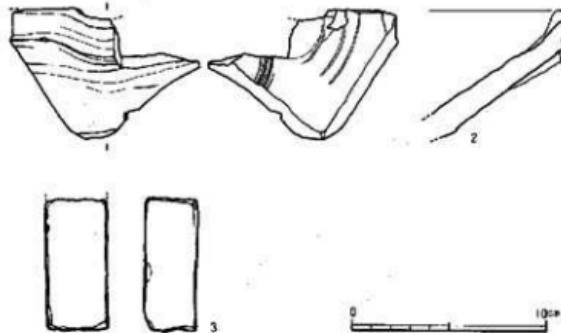
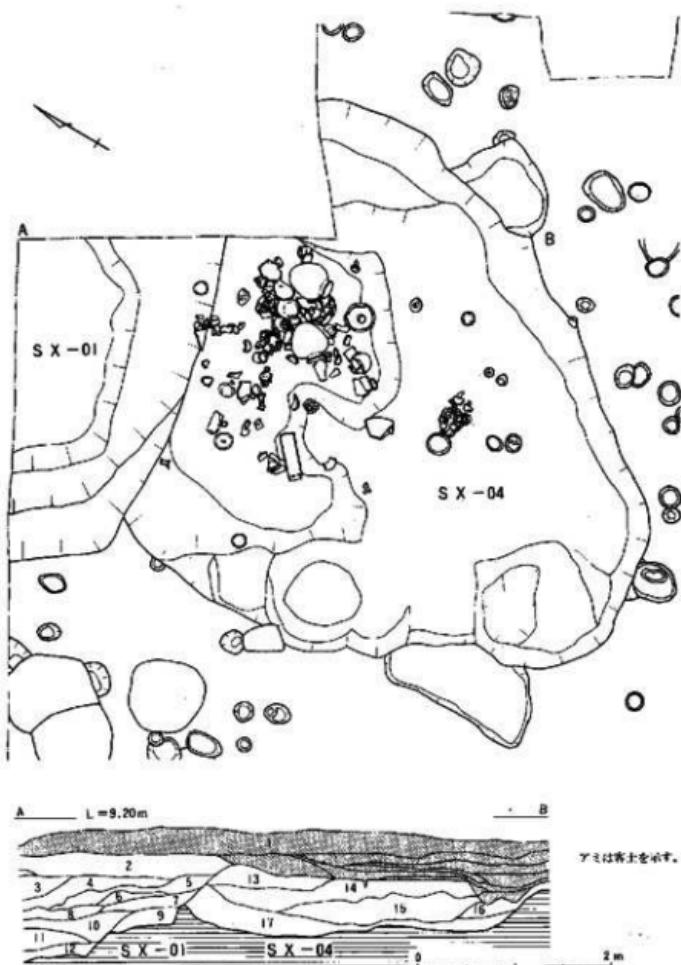


Fig. 8 S X-04出土遺物実測図 (1/3)



#### 土層断面図

1. 灰白色砂質土（客土）
2. 明褐色混小ロームブロック土
3. 明褐色砂質土
4. 明灰褐色混黑色ブロック上
5. 明褐色混黑色ブロック土
6. 黑褐色粘土
7. 灰明褐色土層（ブロックをほとんど含まない）
8. 明黄褐色、黒褐色ブロック上（ベースは明灰褐色だがブロックが大半を占める）
9. 淡褐色、混嵌細黄褐色ブロック土（12に近いがブロックは粗）
10. 明褐色、淡黒色ブロック土（ブロックが少ない）
11. 明灰褐色粘質土（黒褐色ブロック・細黄褐色土8~15mm粒含む）
12. 明淡褐色、混嵌細黄褐色土ブロック土層
13. 黑褐色粘質土
14. 黑褐色粘質土
15. 黑褐色粘質土（14より粘質が強し、茶色がかる）
16. 黑褐色粘質土（14に近い）
17. 黑褐色粘質土（微細黄褐色5~6mm粒を含む）

Fig.7 S X01, S X04実測図 (1/60)

器高4.8cmを測る。立ち上りは环身と比べ長く、器厚は薄い。外面の回転ヘラ削りの範囲は体部1/2未満である。45の环身外底部にはカキ目が施され、脚部下位に3条の沈線がラセン状に巡る。内外面の絞り痕は明瞭である。46の脚部外面にはカキ目が部分的に残り、中位に沈線が1条巡る。47の脚部は細い基部から裾広がりに外方へ延び、端部近くに凹線を配して下方に折れる。その端部は平坦面を為す。基部には上下2段のスカシ窓を3方向に刻む。スカシ窓間には3条の沈線を巡らす。脚部裾端の径は13.7cm、脚高12.3cmを測る。

施 (48~50) 何れも口頭部を欠損し、体部のみ遺存する。体部は小形で、48、50が球形を呈すのに対し、49は肩部が張り屈曲して底部へ直線的にすぼまる。底部はほぼ平坦である。図示した3点に文様帶は無く、48の体部中位に1条、49の肩部に2条の沈線が巡る。カキ目が48の体部上位と49の体部上位から頸部にかけて施されている。尚、48、49の外底部にヘラ記号を有す。

壺 (51、52) 51は台付である。体部は中位に最大径をもつ球形を呈す。中位には沈線を巡らし、以下カキ目を施す。胴部最大径13.8cmを測る。52は直口短頸壺である。口径7.0cm、胴部最大径12.9cm、器高8.8cmを測る。外面の体部下半が回転ヘラ削り調整である。

鉢 (53) 53は口径12.2cm、器高8.7cmを測る。丸底ぎみの底部に回転ヘラ削り調整を施す他は回転ナデ調整である。

提瓶 (58) 体部径18.8cmを測る。取手は無く、肩部に2本の沈線状ヘラ記号を刻む。

甕 (54~57、59~63) 小型から大型のものまで出土した。口縁端部の作りに若干の差異が認められる。59、60、62、63は口縁端部を肥厚させ、そこに浅い凹線を巡らす。54、61の口縁端部も肥厚するが、凹線は認められない。尚、54、59、はその先端を内側につまみ上げている。55の口縁端部は肥厚しないが、前記のもの同様、外側に折り曲げる手法である。56、57の口縁端部も肥厚するが凸凹の多さ、深さが異なり装飾度が高い感じを受ける。文様帶は57の頸部に斜位の連続する刻みを見るのみで他には無い。成形は外面に木目直交平行タタキ後、カキ目が部分的に巡る。59の肩部にはカキ目が施されている。内面には吉海波文、同心円文のタタキ痕が残る。ヘラ記号は56、59、61の頸部に刻まれている。59~63は完形ないし復元完形品で出土した。

#### 土師器

甕 (64~69) 64、65の小型の甕は胴部が張らず、口径と胴部最大径がほぼ同じの器形を為す。頸部の屈曲も滑らかに移行する。外面ハケ、内面ナデ調整である。大型の66~68は口径より胴部最大径の方が大きい張りのある長胴形を呈す。底部は安定の悪い斜めの平底を為す。69の底部も平底に近いが胴部へは開かずに移行し、胴部最大径が下位にくるタイプである。66~68の胴部外面にはタテ方向のハケ目を施し、内面はナデ若しくはヘラナデの調整が施されている。尚、64、65は完形に近い。

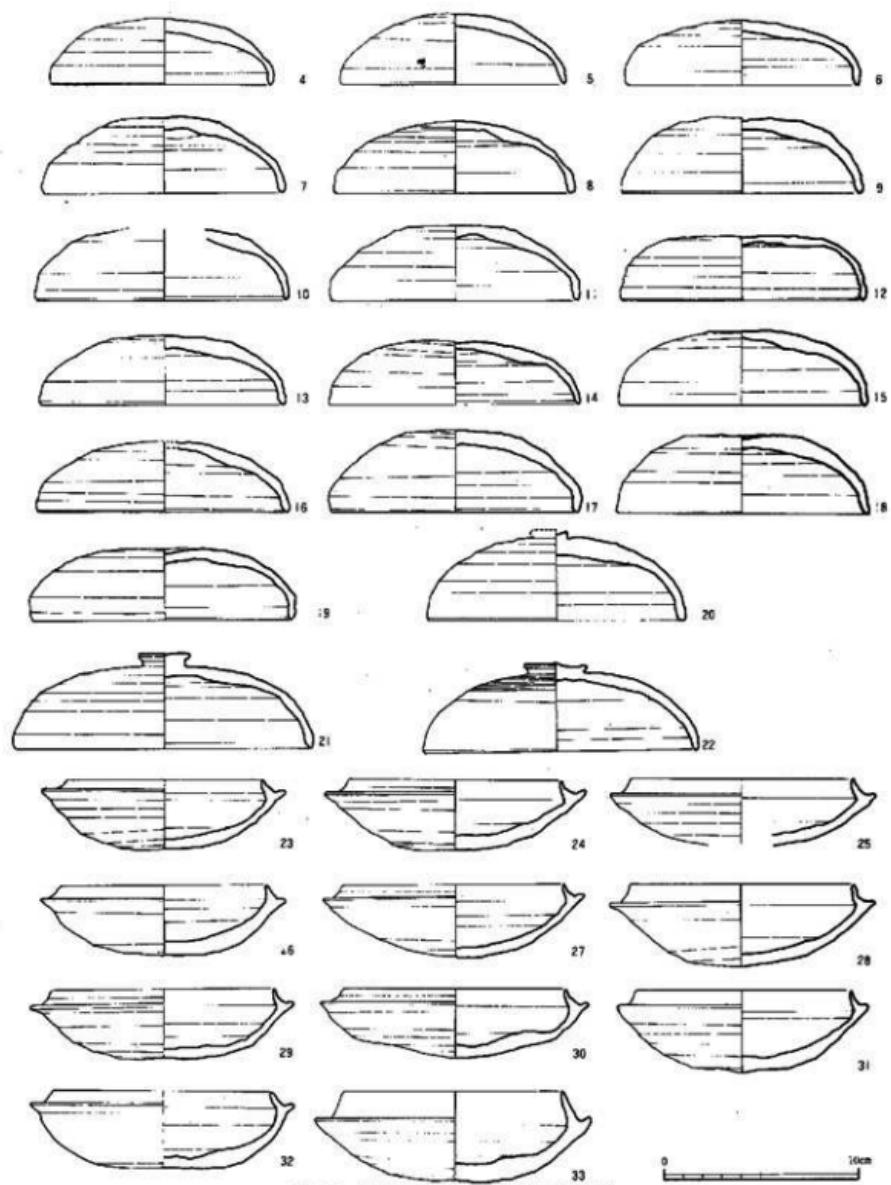


Fig. 8 S X04出土須恵器実測図(1) (1/3)

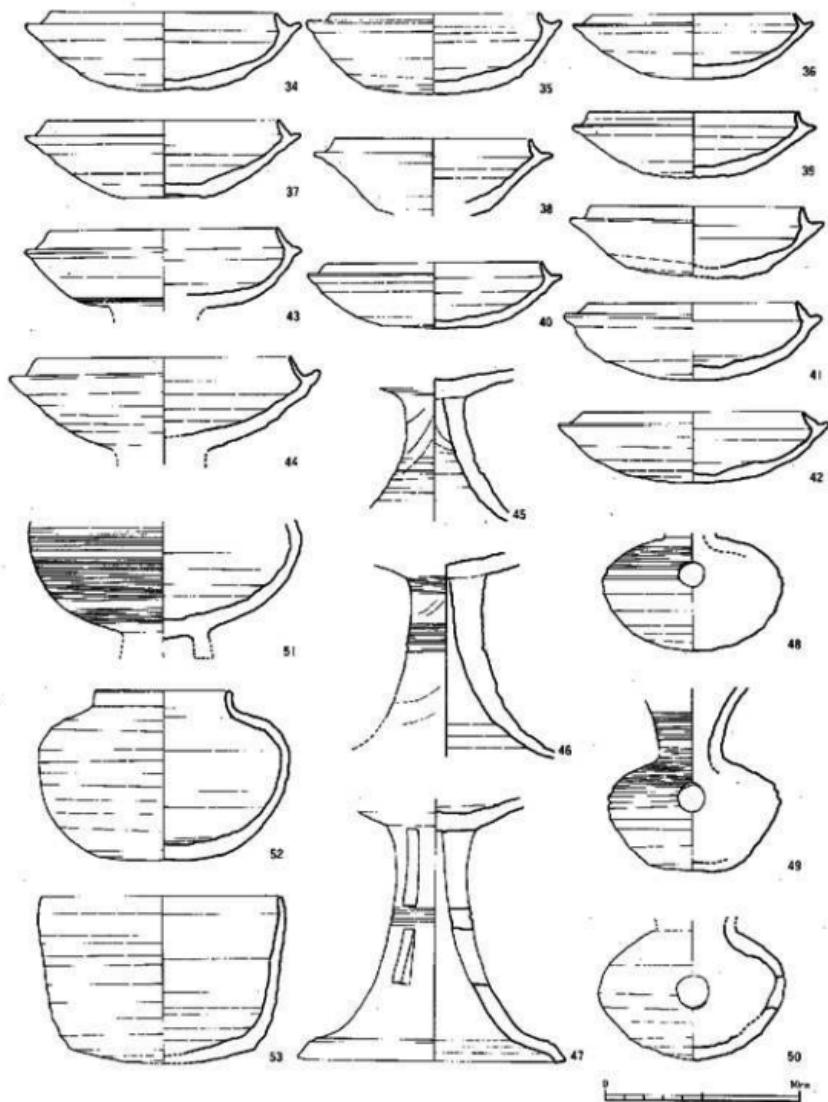


Fig. 9 SX04出土須恵器実測図(2) (1/3)

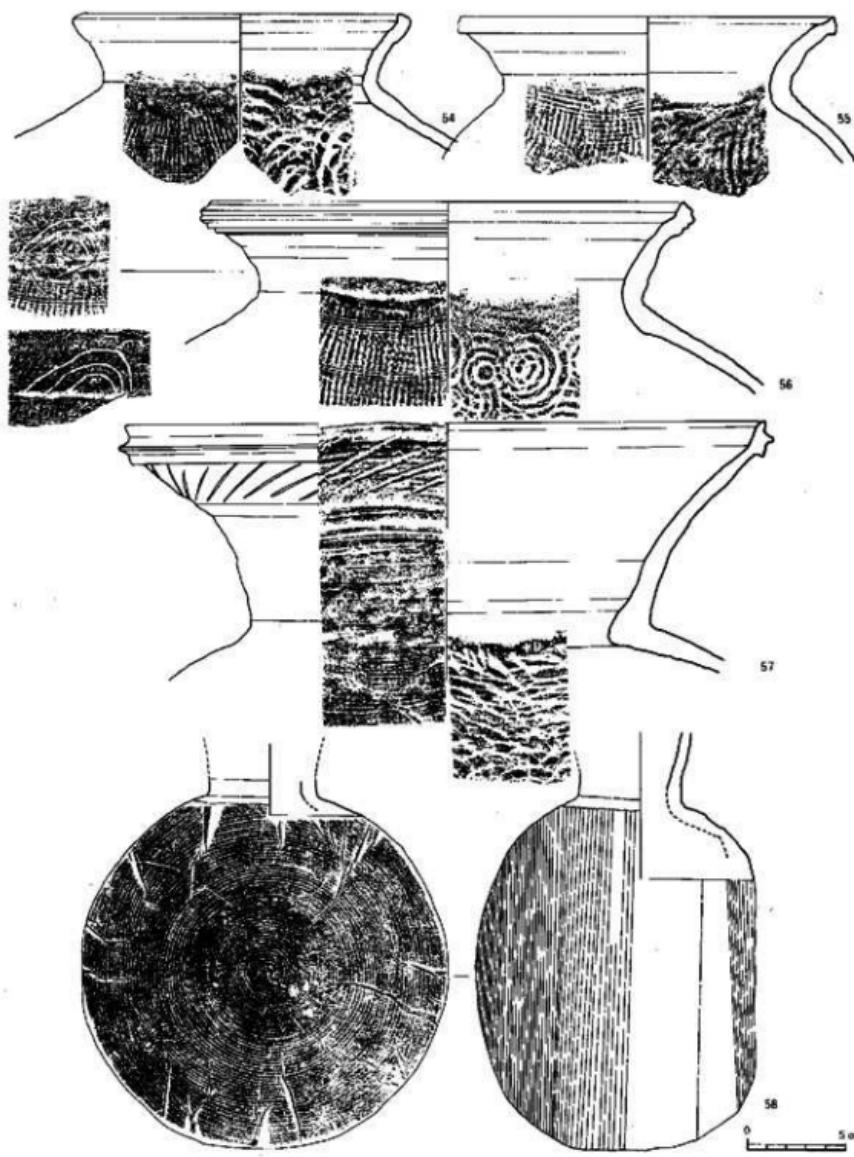


Fig.10 S X04出土頸器実測図(3) (1/3)

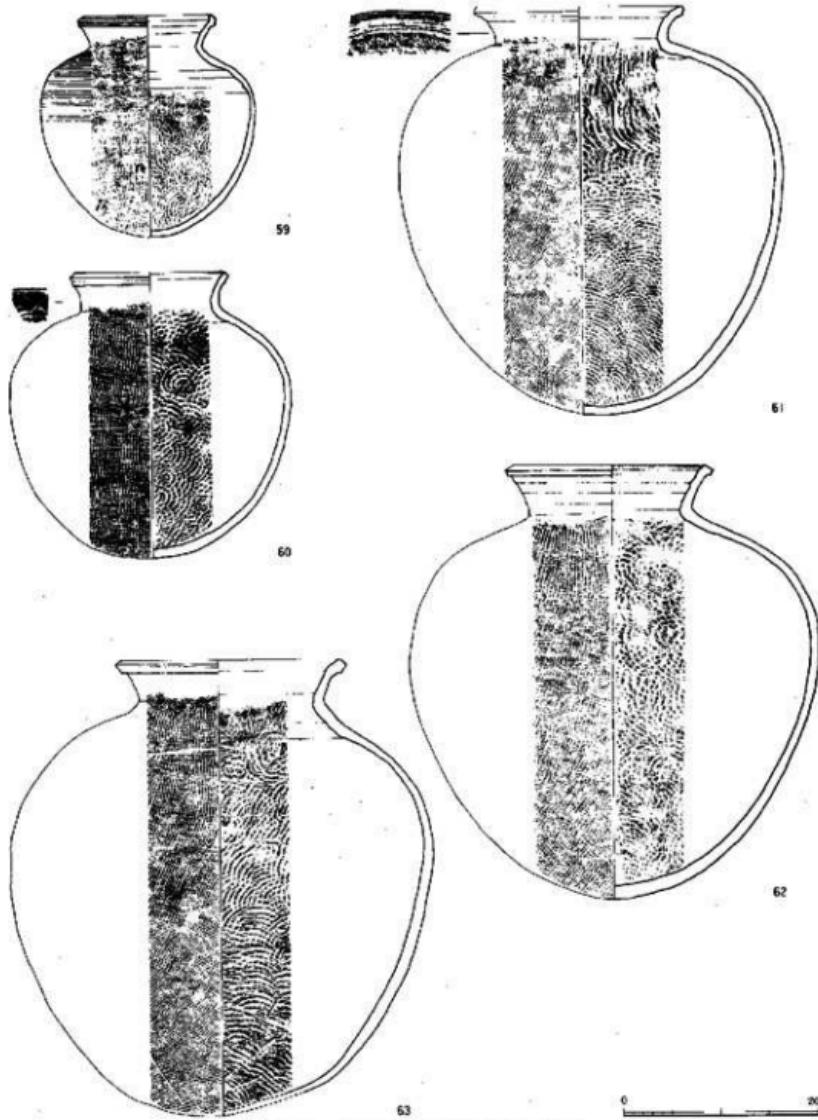


Fig.11 S X04出土須恵器実測図 (1/6)

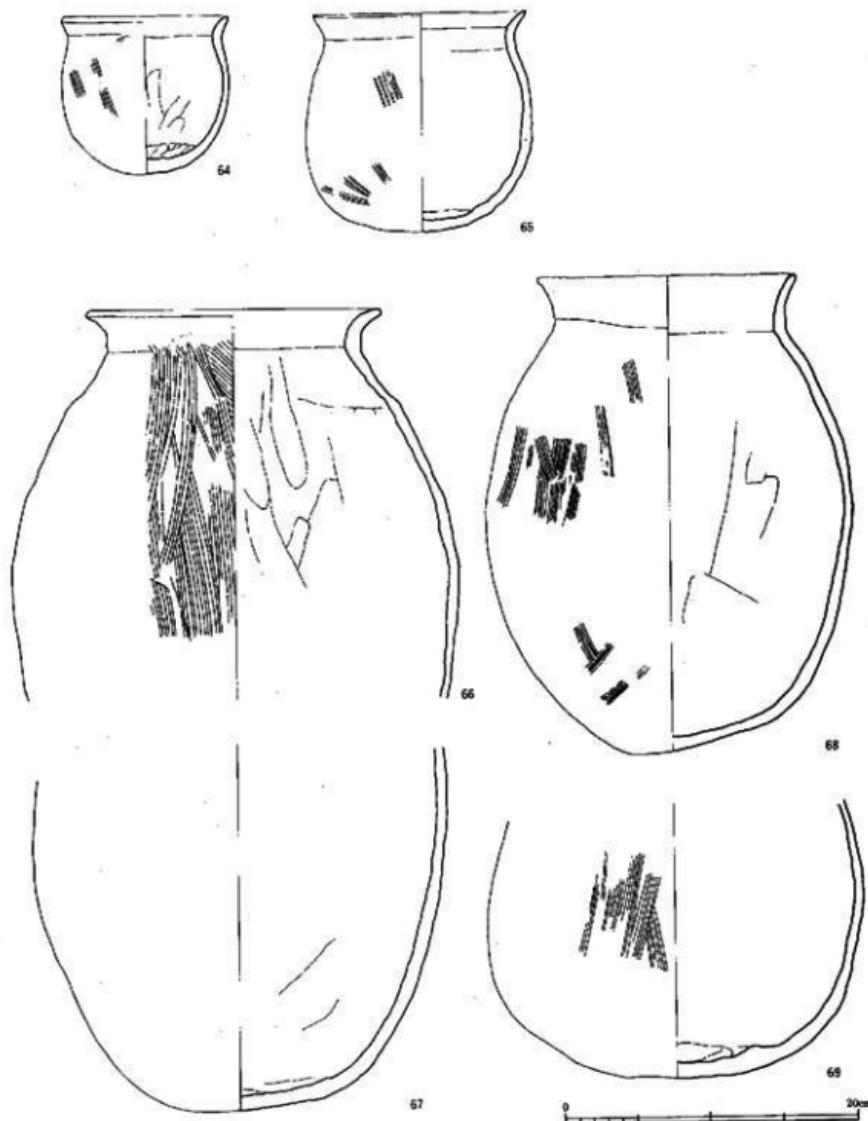


Fig. 12 SX04出土土師器 (1/4)



Fig. 13 S X04出土須恵器ヘラ記号拓影

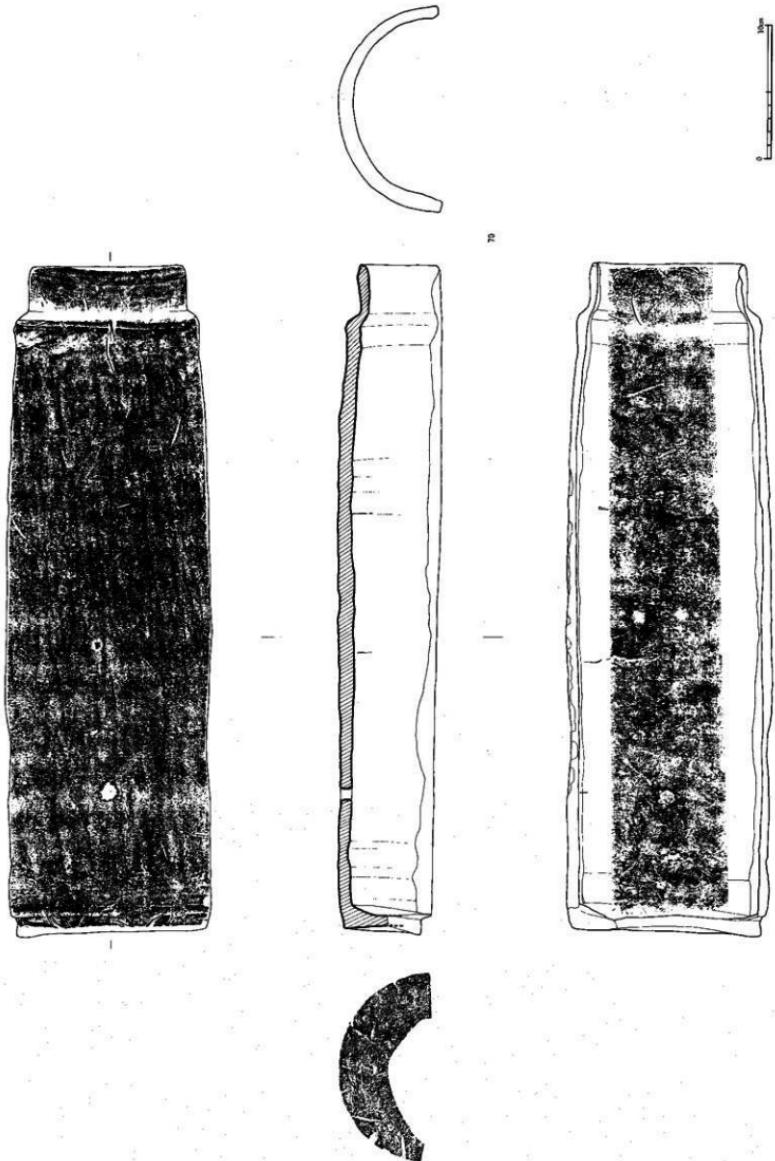


Fig. 14 S Xu (土瓦) (1/3)

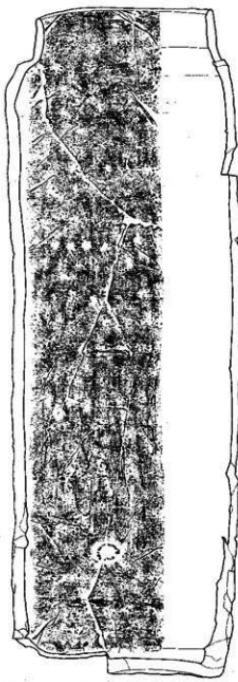
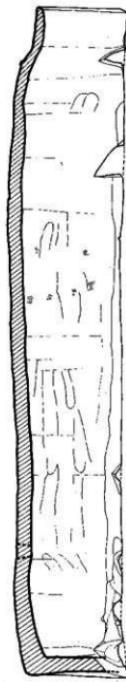
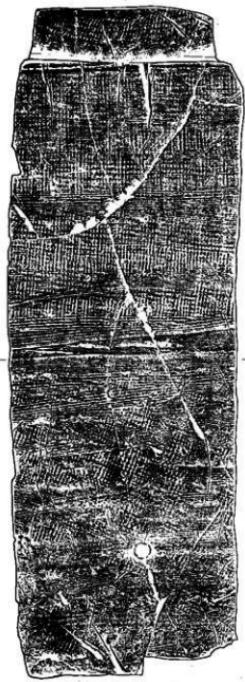


Fig. 15 SX04玉戈(图2) (1/3)

## 瓦

太宰府市の「神ノ前窓」出土瓦と極めて類似する瓦が出土した。時期とともにその需給関係が特に留意される。尚、同様の瓦が那列23次調査においても出土した。

軒丸瓦 (70~72) 70は全長48.6cm、丸瓦体部の最大径15.3cmを測る。瓦当は無文で中央部及び下半部を欠損する。瓦当径14.7cm、遺存する中央付近の厚みは0.7cmである。瓦当面はナテ調整を行い、周縁が若干高くなる。裏面もナテが施される。丸瓦は中央がややふくらむ器形を為す。凸面は瓦当面から2.4cmのところまでカキ目が認められ、他はヨコナデとその後行った継位のナテ痕跡が明瞭に残る。特に玉縁の段から体部にかけて7.0cm位の範囲はこの継位のナテ調整により凹む。瓦当面から10.0cmの位置に径1.0cmの釘穴を穿つ。凹面は中央部にヨコナデの痕跡をとどめるが、他はその後のタテ若しくは斜め方向のナテによって、ヨコナデの痕跡が不明瞭となる。尚、3箇所に粘土紐の継ぎ目が認められる。側縁の調整はヘラ削りによるものと考えられるが、その端部に粘土の被覆が剥落し、ヘラ削り面と思われる面が露呈する。従ってヘラナデが加えられたのであろう。玉縁は丸瓦体部から斜めに段がつき、その段差は0.9cmを測る凸凹面ともにヨコナデを施し、端部は丸く収める。色は灰白色を呈し、焼成は軟質で器面が粗れている部分も多い。胎土に砂粒を含むが、須恵器に比べ比較的少ない。

71は全長49.7cm、丸瓦体部径17.0cmを測る。瓦当は無文で下半を欠失する。瓦当径16.0cm、中央の厚みは1.2cmである。瓦当面はランダムなヘラナデ後若干、ナデを加える。周縁がやや高くなり、瓦当側縁から丸瓦体部にかけてハケ調整が施される。裏面はヨコナデ後中心部にナデを加える。丸瓦上面は瓦当面から玉縁部にかけてゆるやかにカーブする。凸面は細かな格子目タタキ後ヨコ方向にカキ目が施される。若干、タテ方向のハケ目もその上に認められる。瓦当面から9.2cm、丸瓦体部の中心からややずれて径0.9cmの釘穴が穿たれている。凹面はヨコナデ後、強いタテ方向のナデが施されている。また、この継方向のナデに切られるヨコ方向のハケ目が若干、認められる。側縁はヘラ削りによって仕上げられる。玉縁は丸瓦体部から斜めに段がつき、その段差は約0.7cmを測る。凸面は端部近くまで格子タタキ痕とその後施されたカキ目が残る。凹面はヨコナデ調整を施す。玉縁端部は丸く収めている。色は灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土には砂粒を含むが多くはない。

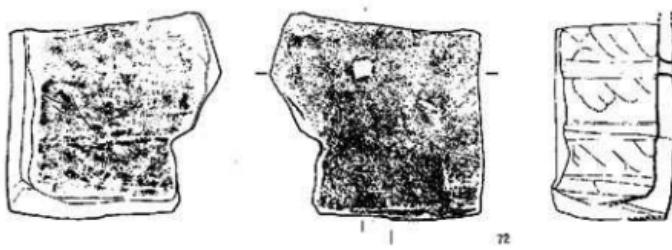
72は丸瓦径15.0cmを測る。瓦当は無文で、約2/3を欠失する。瓦当径は復元14.2cm、中央の厚みは1.2cmを測る。瓦当面はヘラナデ若しくはナテ調整によるものと考えられる。裏面はヨコナデ後ナデを加える。中心部と周縁の高さは変わらない。丸瓦上面は緩やかに高く移行する。凸面は器面が粗れて不明瞭であるが、ヨコナデ後タテ方向のナデを施したものと考えられる。瓦当面から10.1cmの位置に径1.0cmの釘穴を穿つ。凹面はヨコ方向に幅3.5~4.5cm間隔で回みが認められる。破損の状況から粘土紐の接合部と考えられ、その位置にヨコナデが加えられたものと考えられる。その回みを切って斜めタテ方向の指腹によるナテ痕が強く残る。側縁の調

整はヘラ削りによる。淡青灰色を呈し、焼成は軟質。胎土に比較的多くの砂粒を含む。

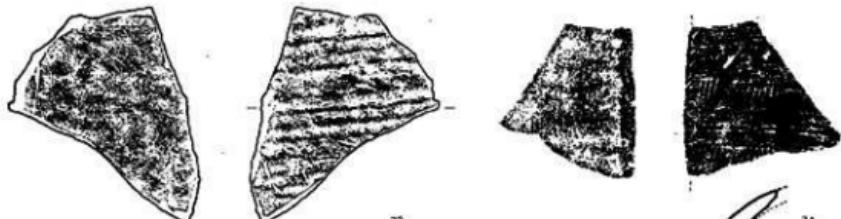
丸瓦 (73~76) 73の凸面はヨコナデ調整による横位の起伏が強く残る。その上から更に斜位ないし縦方向のナデが加わる為、ヨコナデ痕が乱れている。凹面も同様にヨコナデ調整後斜位にナデを加える。器厚1.0cmを測る。凸面青灰色、凹面灰白色を呈し、焼成は堅緻である。胎土には白色細砂粒を含むが少ない。74の凸面は木目直交平行タタキ調整後ヨコナデないしナデを施す。タタキ痕は部分的に残り、ナデ消されたものと考えられる。凹面はランダムな指ナデが認められる。側縁はヘラ削りで仕上げる。淡青灰色~灰白色を呈し、軟質である。胎土には微砂粒を若干含む。75の凸面はカキ目、凹面はヨコナデ後ナデ調整を施す。端部および端部近くの凹面はヘラ削りを施し、端部は平坦面を為す。器厚は端部にかけて1.0cm~0.6cmに細まる。灰色~灰白色を呈し、やや軟質である。胎土に含む砂粒は少ない。76の丸瓦凸面はわずかに木目直交平行タタキが残るがヨコナデによってほとんど消される。凹面はヨコナデ後指ナデを施す。遺存する丸瓦の一部が反り上るが、両面から縦位のナデがあてられている。玉縁の段差は0.5cmを測り、低い。玉縁の凸面ヨコナデ、凹面はヨコナデ後、段部から端部にかけてナデ上げる。凸面の段部下にヘラによる横位の沈線が走る。段の成形時に残ったものであろう。色は淡赤褐色を呈し、比較的、硬緻である。胎土に砂粒をほとんど含まず緻密である。

平瓦 (78~82) 78の凹面はヨコナデ後、縦位のナデを主にランダムなナデを施す。凸面は木目直交平行タタキ後ヨコナデないし横位のカキ目を施し、更に縦位のナデを行う。端部は丸く収める。側縁はヘラナデによって仕上げる。色は灰色~灰白色を呈し軟質である。胎土には砂粒をほとんど含まない。78は凸凹両面ともにヨコナデ後斜位のナデを主にランダムなナデを加える。端部はすばまって丸く収める。凸面の端部はわずかに肥厚する。色は淡赤褐色を呈し軟質である。胎土は砂粒をほとんど含まず緻密である。79の凹面は器面が粗れて調整が不明瞭であるがナデ調整か。凸面はヨコナデ後斜位のナデを施す。わざかにハケ目が残る。端部は凹面からのヨコナデないし縦位のナデ上げによってすばまり、丸く仕上る。色は淡赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土には砂粒を少し含むが緻密である。80の凹面は調整不明、凸面は丁寧に縦位のナデを施す。側縁はヘラ削りによって仕上げる。器厚は比較的厚く1.6cmを測る。81の凹面もヨコナデ後縦位のナデを主にランダムな指ナデを施す。凸面は強い縦位のナデのみ残る。色は灰白色を呈し、軟質である。胎土は砂粒をほとんど含まず緻密である。82の凹面には斜位の強いナデを施した後、ほぼ同間隔に縦位のナデを行う。凸面は縦位のナデを主に施す。側縁はヘラナデによる。色、胎土、焼成とともに81と類似する。

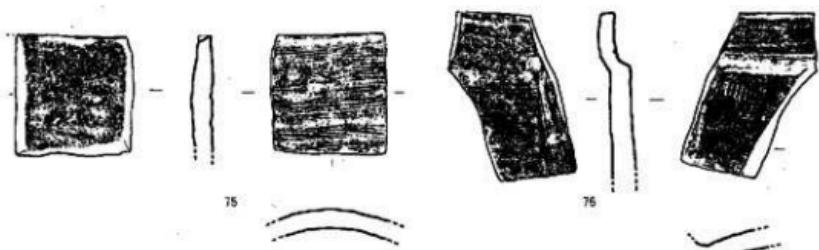
以上、各個別に説明してきたが、これらの手法は極めて神ノ前窯出土瓦と類似するものである。まとめる余裕がないが、出土時期について付して置きたい。神ノ前窯出土の瓦はその時期を中村氏の編年で言うII型式4段階に比定されている。しかし、今回共伴した土器類には新しい様相が認められ時期的に降ると考える。廃棄までに用いた時間差であろうか。



72



73



75

76



Fig. 16 S X04瓦实测图(3) (1/3)

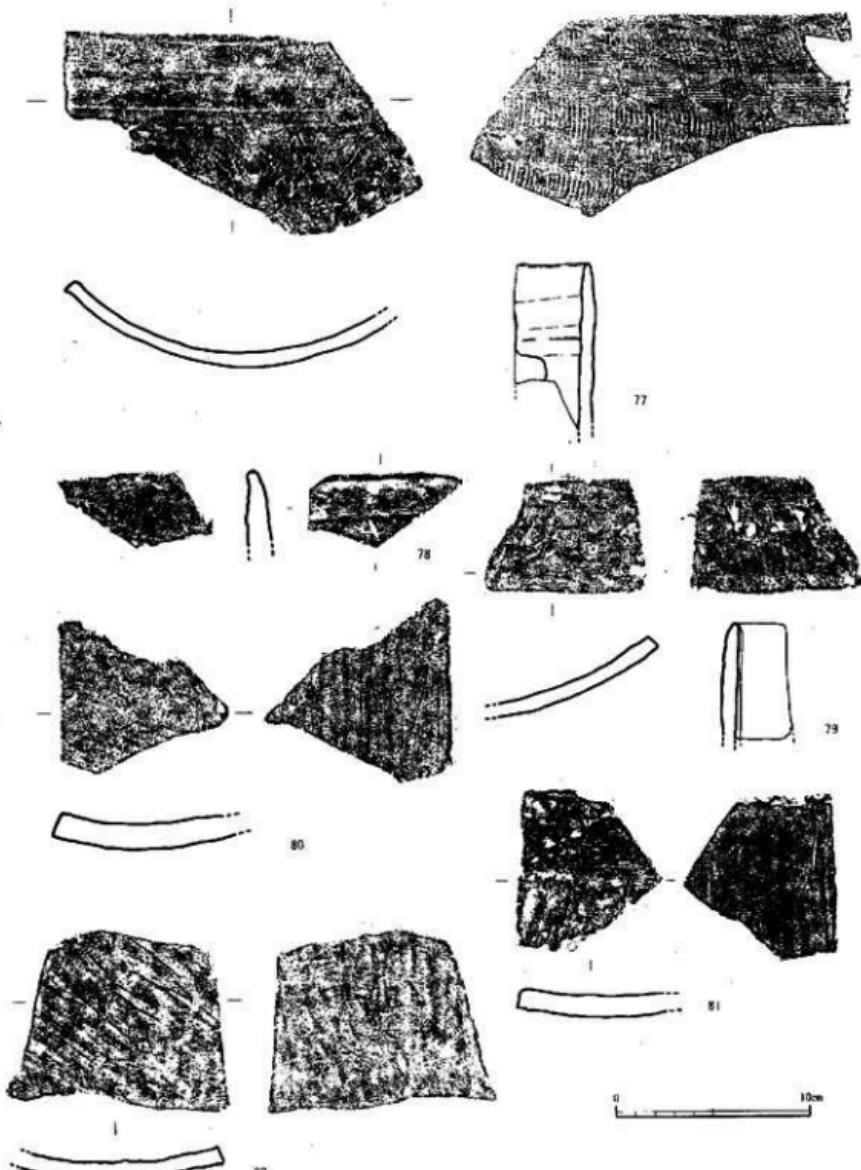


Fig.17 S X04瓦实测图(4) (1/3)

S X-02 (Fig. 18・19)

調査区北側中央で検出された。長径260cm、短径230cmの楕円形プランを呈す。深さは中央の最深部で20cmを測る。基底部は緩やかに中央へ低くなる。出土遺物の83は底端部幅27.5cm、広端部幅は推定29cm前後であろう。凹面はヨコナナデ後縦方向を主にランダムなナナデを施す。凸面は縦位のハケ調整を施し、端部付近は凸凹両面ともにヨコナナデを施す。側縁はヘラナナデによって仕上がる。凹面の中央および右側側縁近くに分割線を入れる。赤褐色を呈し、凹面にススが付着する。胎土は砂粒を含まず緻密である。

緻密である。他に高台付環身片を含む須恵器類、土師器瓶片が出土した。

S X-13 (付図、Fig. 21)

調査区中央部で検出された。径約80cmの円形プランを呈す。深さは21cm。柱穴とも考えられるが柱列は認められない。

102は砂岩製の支脚か。器面は滑らかでやや内曲する。

S X-14 (Fig. 20・21)

調査区中央で検出された。長径は160cm、短径135cmの楕円形プランを呈す。深さは90cmで、下層埋土は還元化した灰褐色になる。基底面に不整形の窪みが認められたが、上層断面からは井筒の痕跡は検出されなかった。102は大型器台の脚部である。内面にナナデ押しの痕跡が明

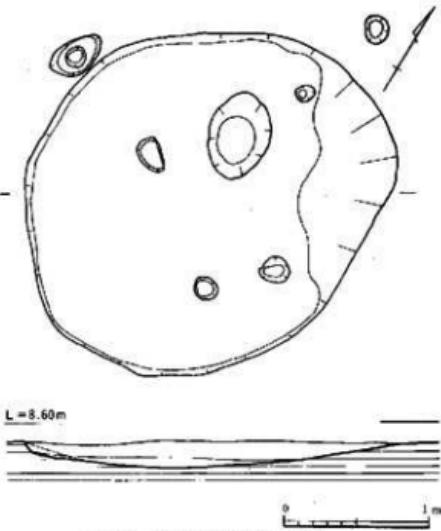


Fig. 18 S X-02実測図 (1/40)

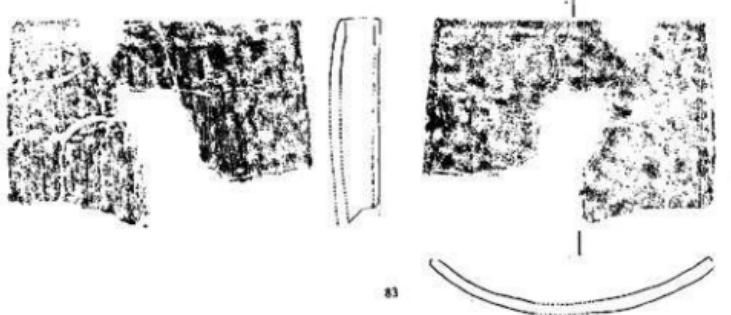


Fig. 19 S X-02出土瓦実測図 (1/6)

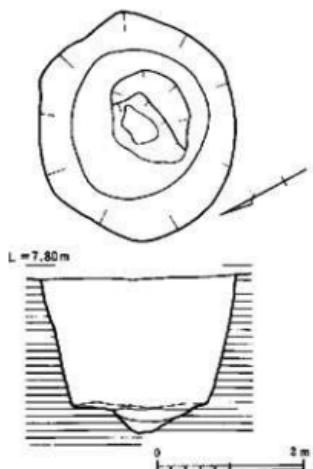


Fig. 20 S X14 実測図 (1/40)

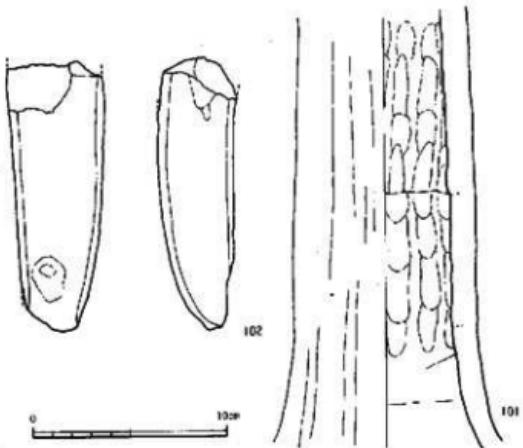


Fig. 21 S X13・14出土遺物実測図 (1/3)

隙に残る。他に遺物は須恵器、土師器の6世紀後半代までのものを含む。

### (3) 溝

調査区の南側に東西方向に走る S D01、S D32 (S D01の延長)、S D26、S D20、21が検出された。他に南北方向に並行して走る溝が断続的に検出された。この溝は幅30cm弱で深さ2~3cmである。烟の歯状のもので時期不明である。

#### S D01・32 (付図、Fig. 22・23)

調査区南側で検出された。ほぼ東西方向へ S D01、32は断続的に延長する。更に調査区南東際で検出された溝へ続くものと考えられる。S D01の幅は西端約100cm、東端約70cm、広まっていく中央部では約130cmを測る。下端は45~60cmで断面台形状を呈す。

S D01の東に延長する S D32の幅は50~70cm、深さは、中央の最深部で40cmを測る。

出土遺物の85は広端部幅は復元で12.0cm前後となる。厚さは1.2~1.9cmを測る。凹面には斜位の木目直交平行タタキを施した後、縦位を主としたナデを施す。凹面は器面が粗れて、模骨の幅、枚数が不明瞭である。凹面の一箇所に模骨を織ぐ紐状の痕跡が認められる。灰色~淡赤褐色を呈す。2次火熱を受け胎上は融解

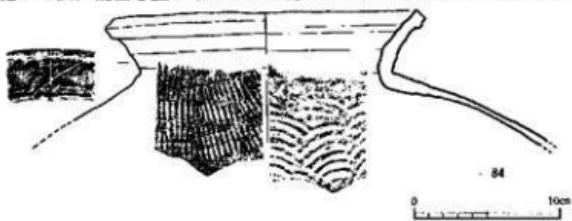
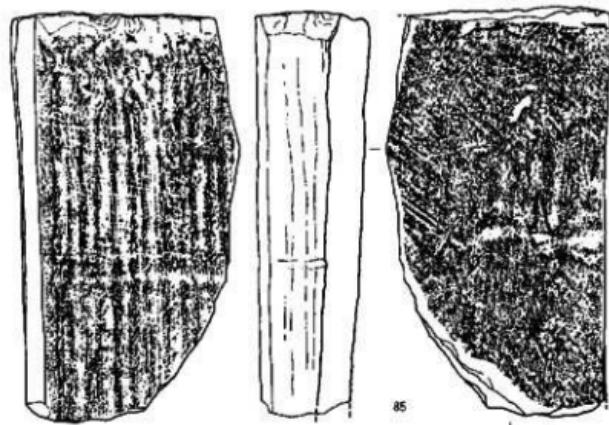
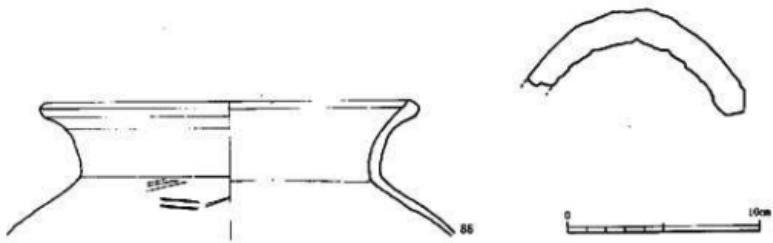


Fig. 22 S D32出土遺物実測図 (1/4)

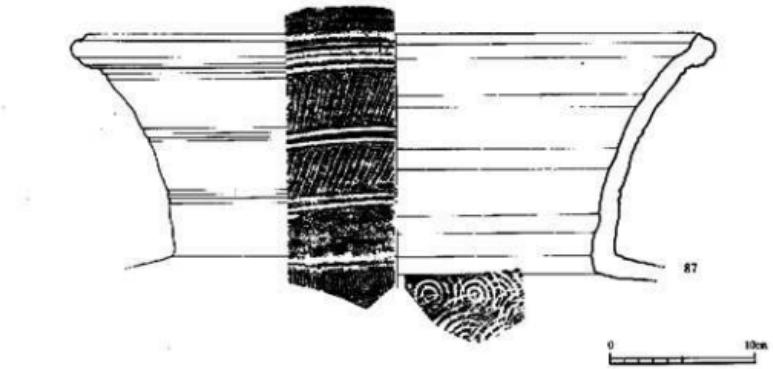
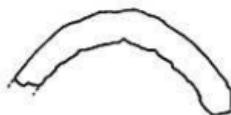


85



86

10cm



87

10cm

Fig. 23 S D01出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

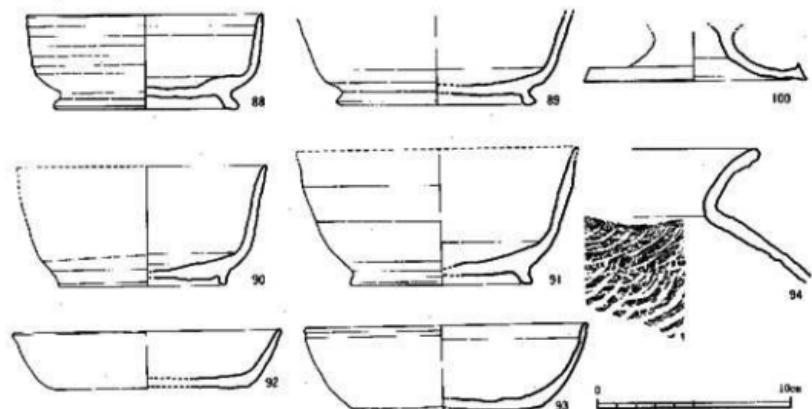


Fig. 24 S D20・21出土土器実測図 (1/3)

している。図示以外の遺物は6世紀後半代のものが多い。

#### S D20・21 (付図、Fig. 24・25)

調査区南際で検出された。S D01、32から4.1～4.3m離れ、東西方向に平行して走る。切り合は確認できなかったが、完掘した時点で中央付近に3、4条平行した溝状の立ち上がりが認められた。この立ち上りは漸次不明瞭となる。S D20・21含めた上端幅3.1m、下端2.6m、深さ10cm程度である。出土遺物の92は十師坏で混入か。88～91、92は須恵器坏身である。88は外底部にヘラ記号を有す。8世紀後半代のものか。

那珂遺跡群では7世紀代より東西、南北に計画的に走る溝が検出されつつある今回も、台地際の状況を示す資料を加えた。

#### 4) 柱穴・遺構検出時出土遺物

99は柱穴、97、98は遺構検出時の遺物である。99は黒耀石製で、基部の抉りが浅いものである。

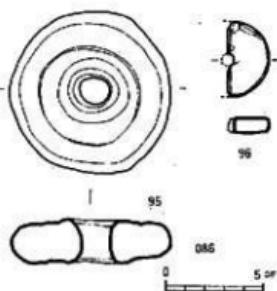


Fig. 25 S D20・21出土紡錘車 (1/3)

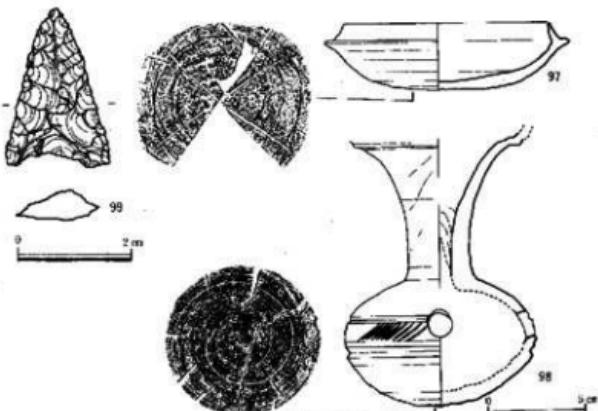


Fig. 26 表探遺物実測図 (1/1.1/3)

図 版  
(PLATE)



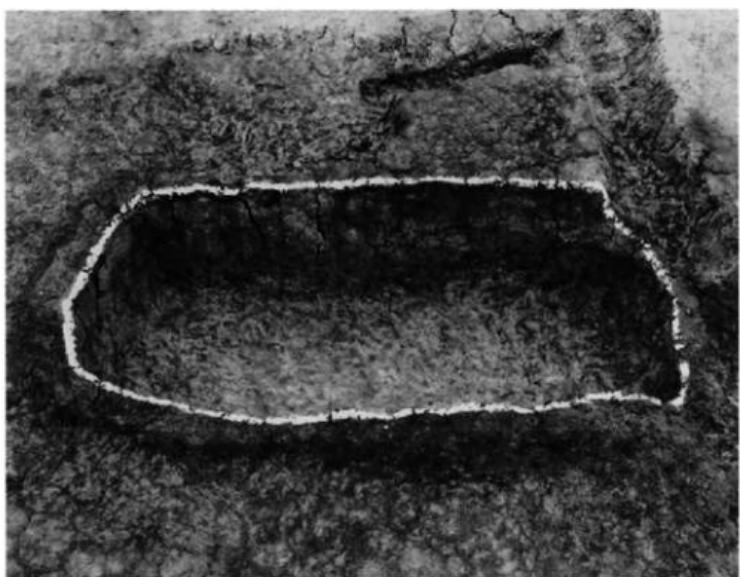
調査区北半全景（南から）



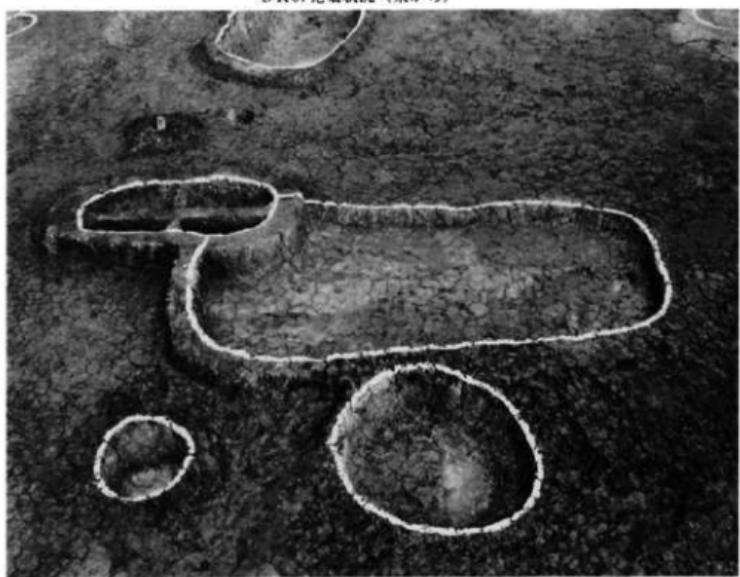
調査区南半全景（北から）



調査区南半全景（北東から）



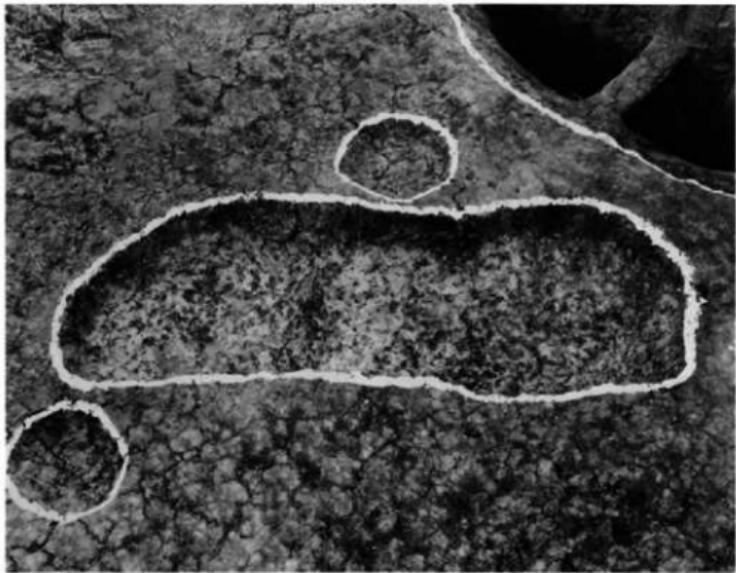
S K 07発掘状況（東から）



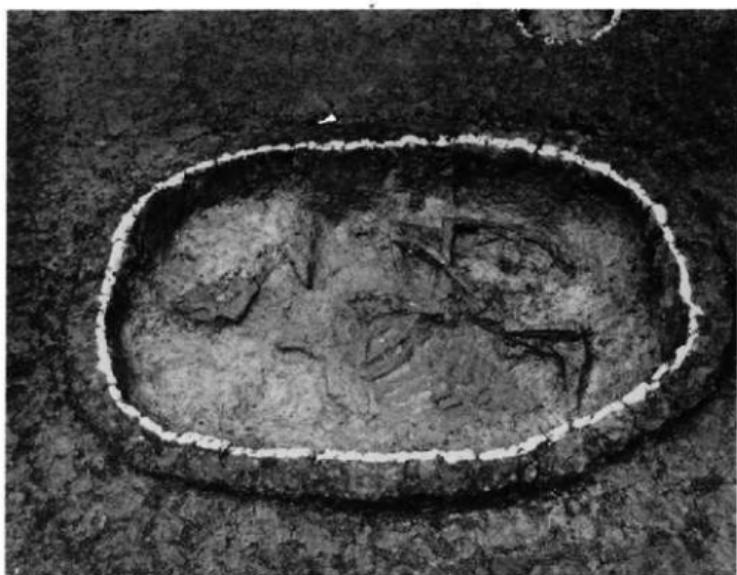
S K 08・09発掘状況（南から）



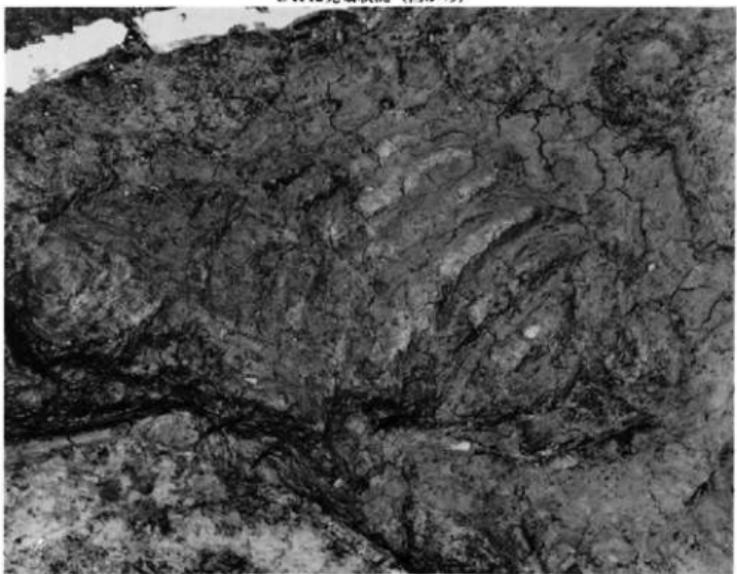
SK 08 完掘状況（南から）



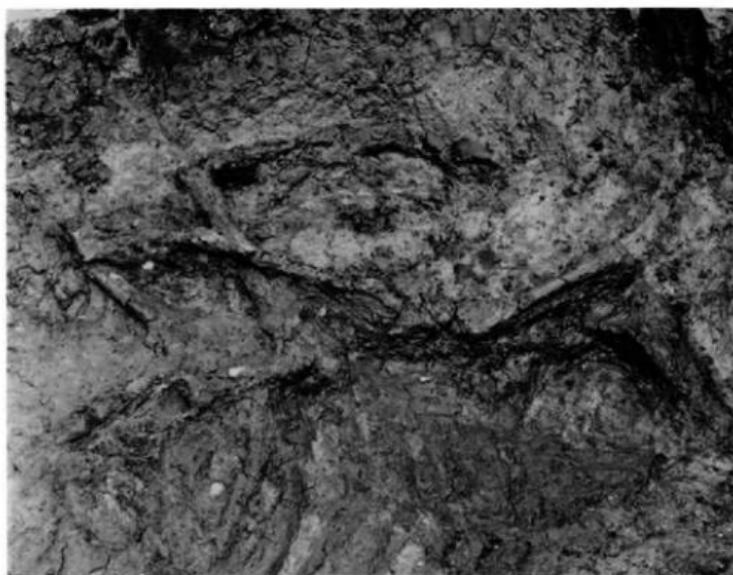
SK 12 完掘状況（西から）



S K 12完掘状況（西から）



S K 12馬骨体軸検出状況（西から）



S K12馬四肢骨検出状況（西から）



S K12馬下顎骨検出状況（北から）



S X04全景（西から）



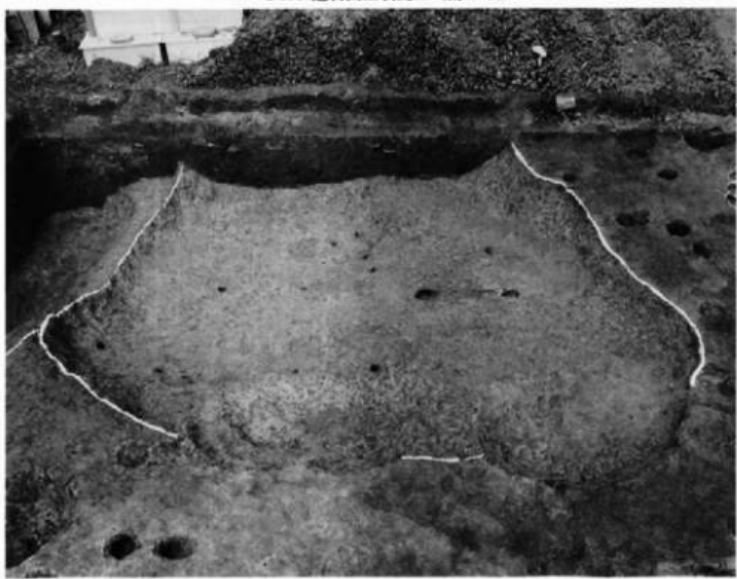
S X04遺物出土状況(1) (北から)



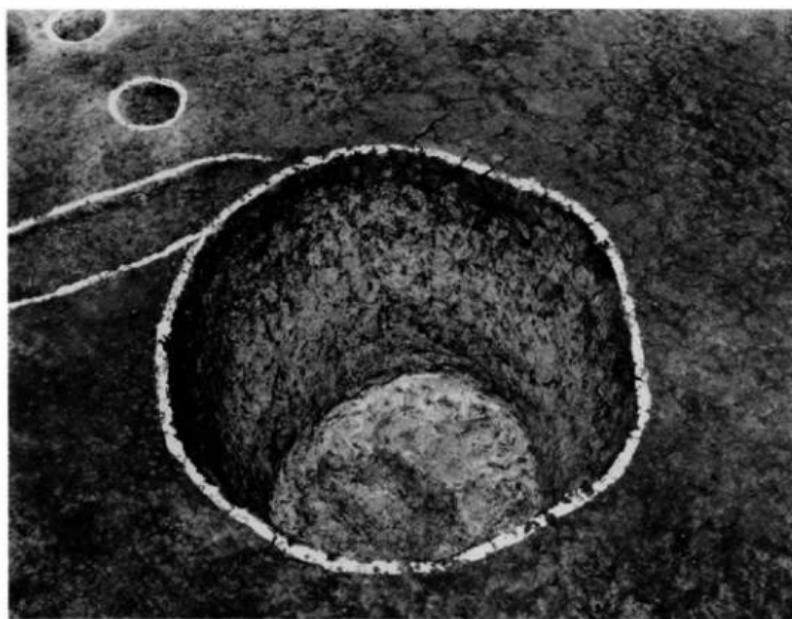
S X04遺物出土状況(2) (北から)



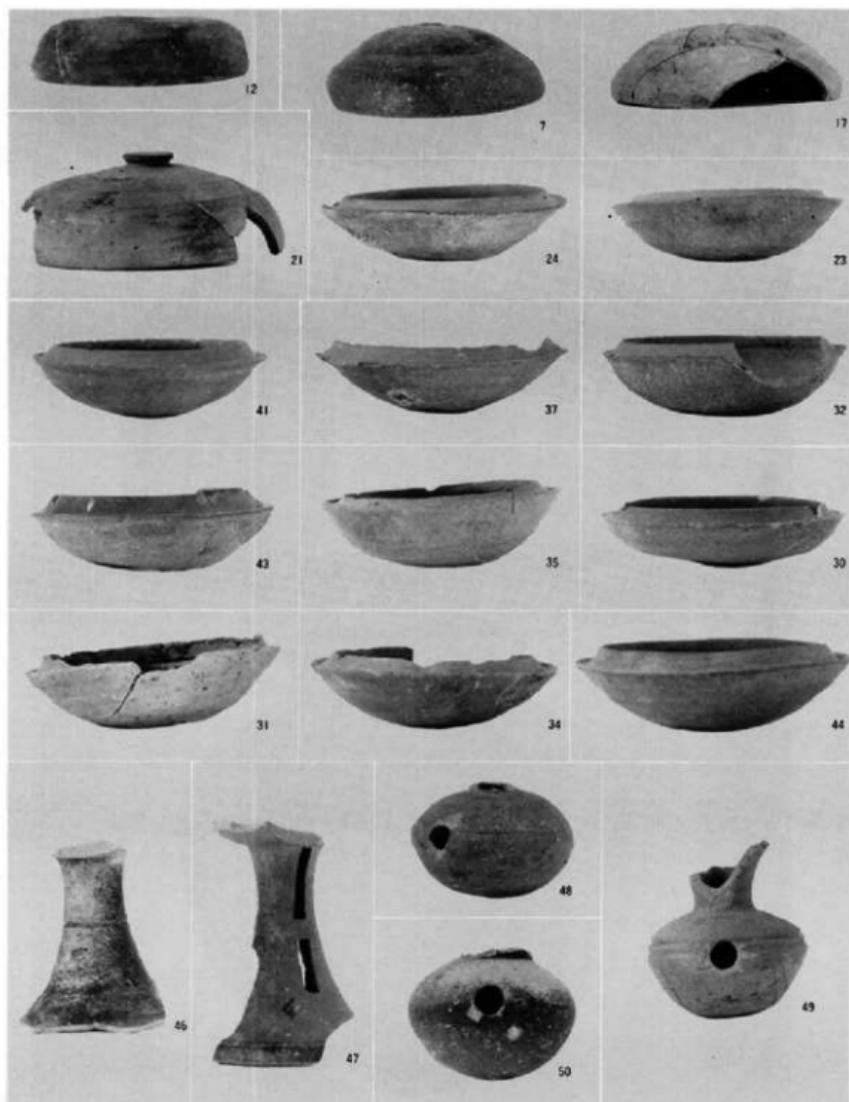
S X04遺物出土状況(3) (南から)



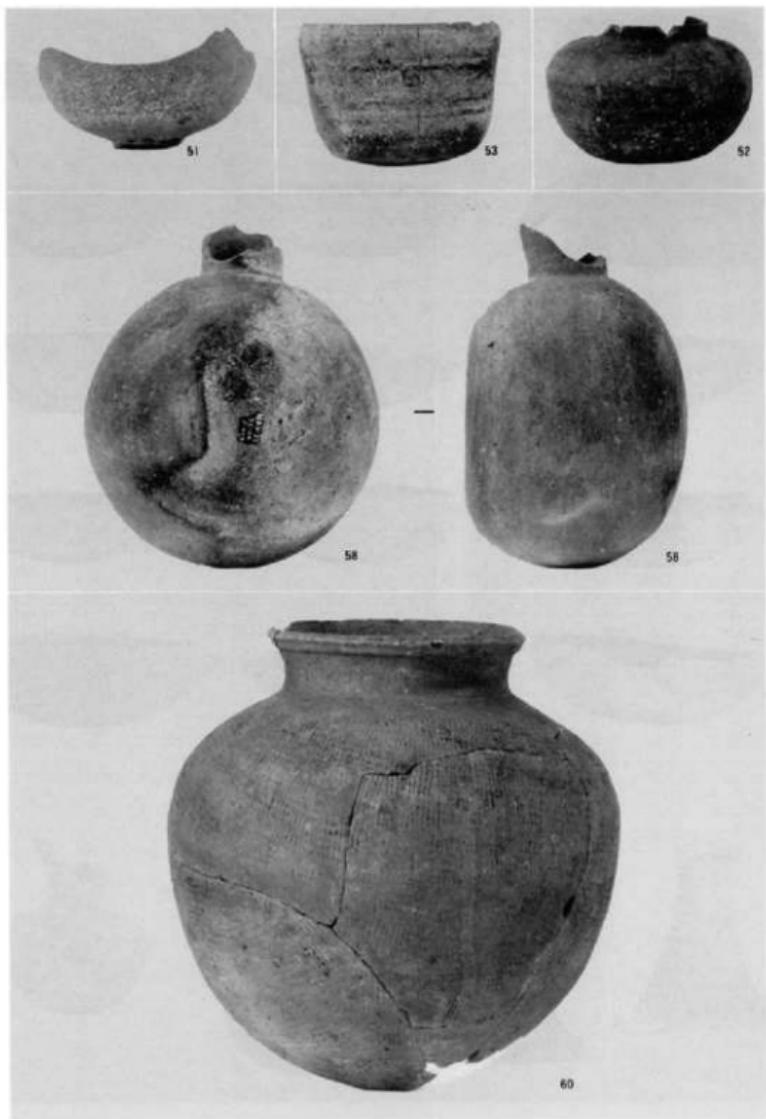
S X04発堀状況 (西から)



S K14完掘状況 (南から)



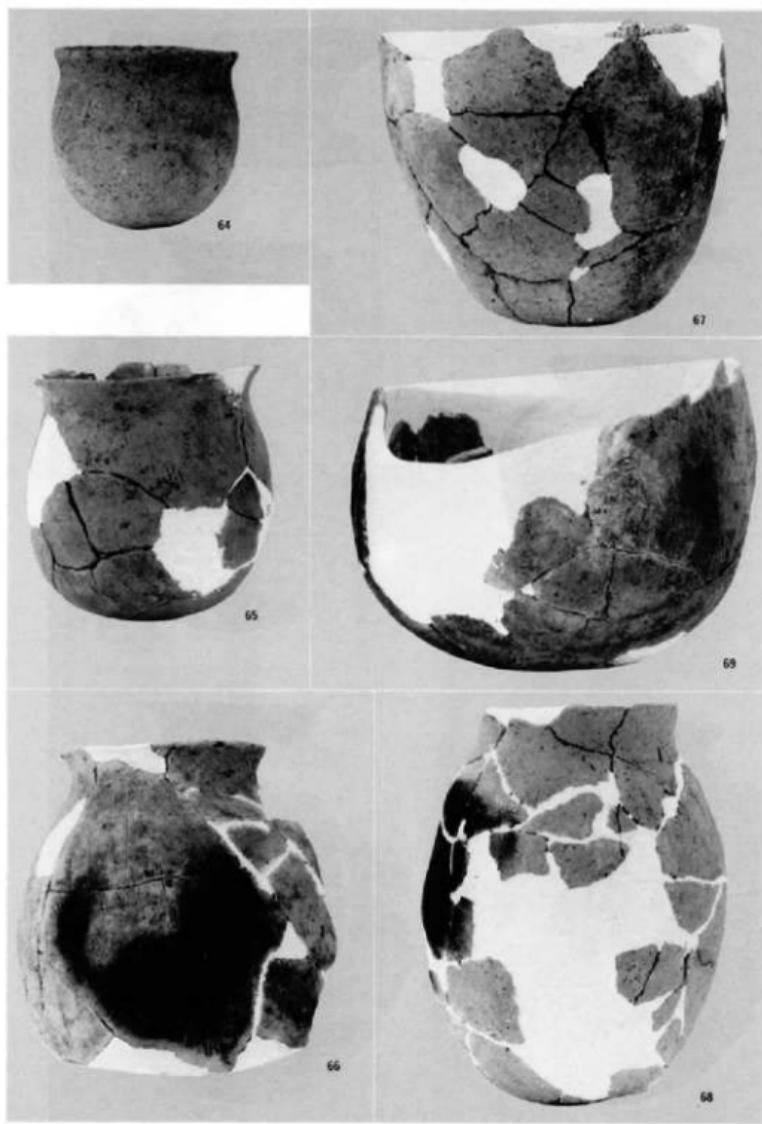
S X04出土須恵器(I)



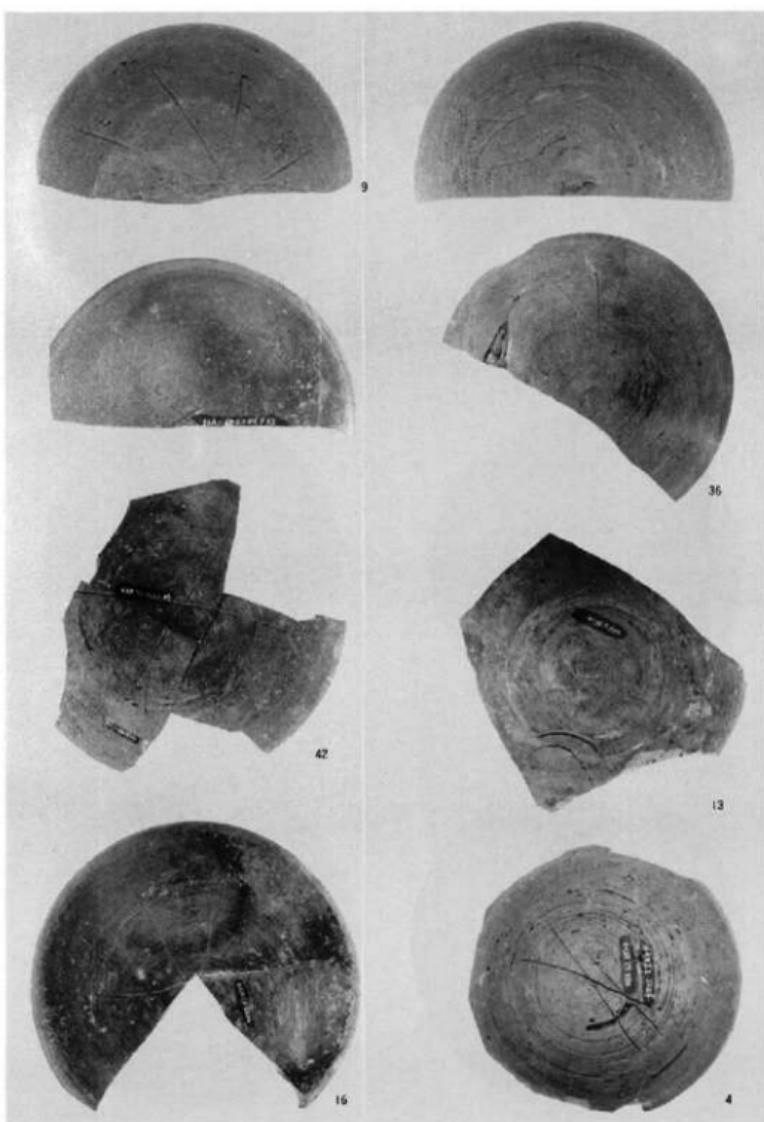
S X04出土須惠器(2)



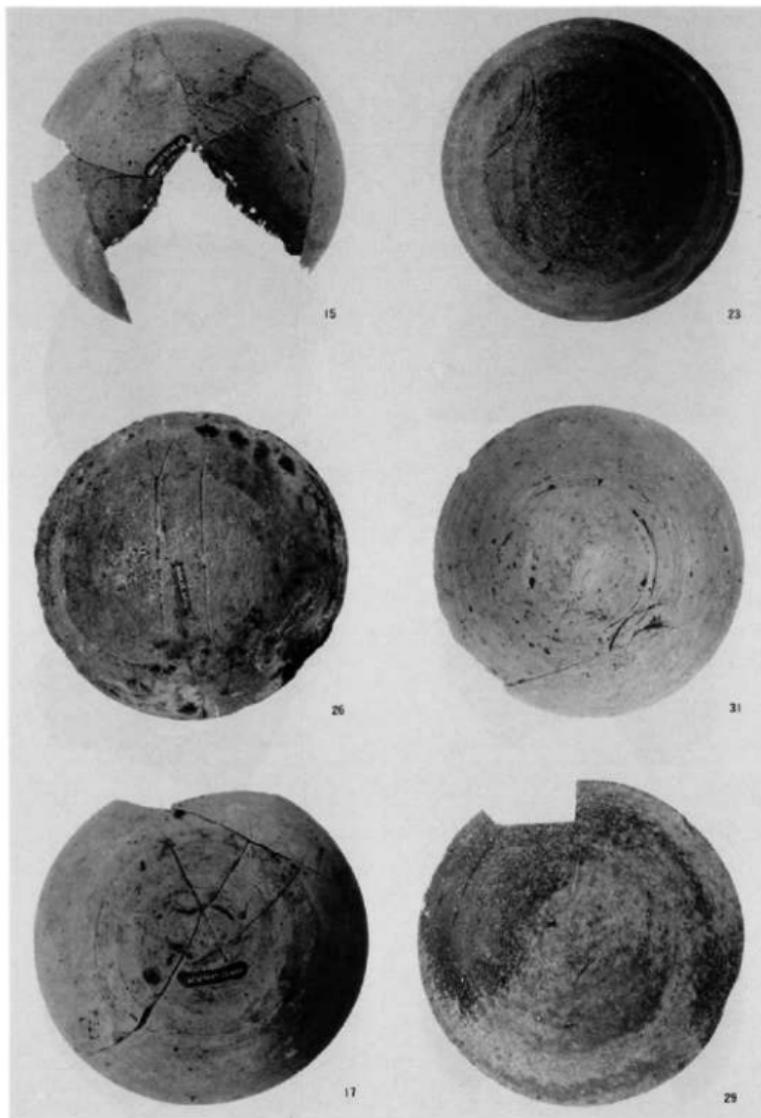
S X04出土頃器(3)



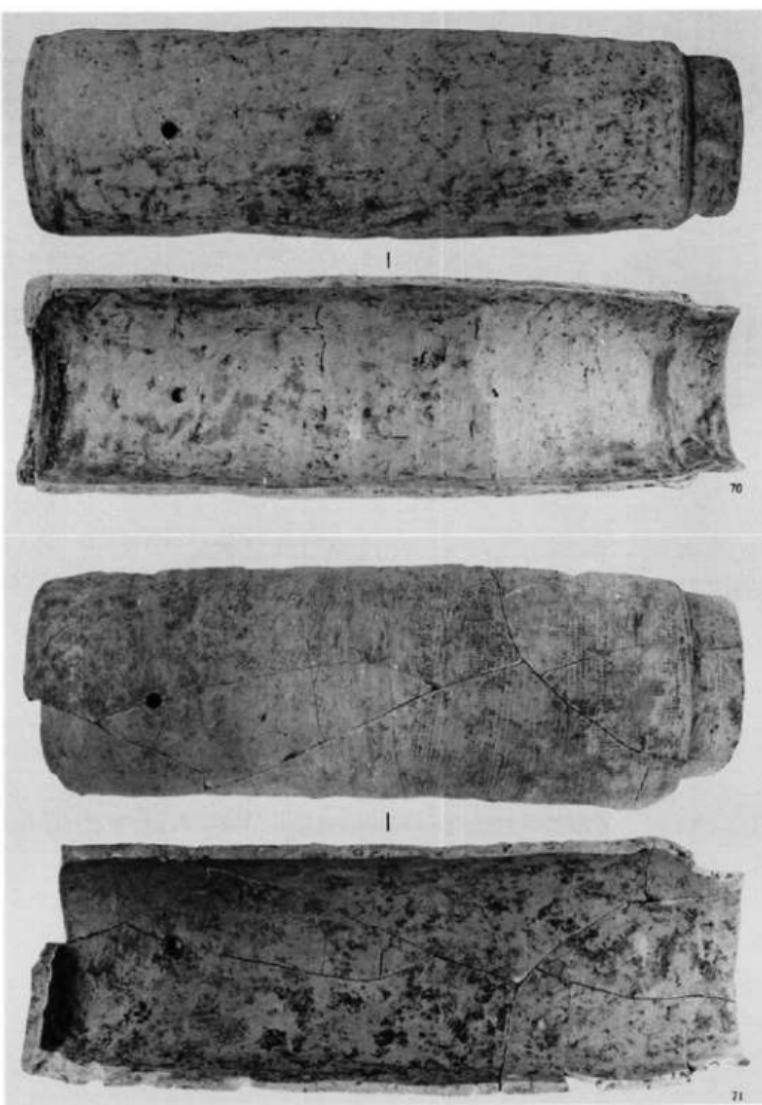
S X04出土土師器



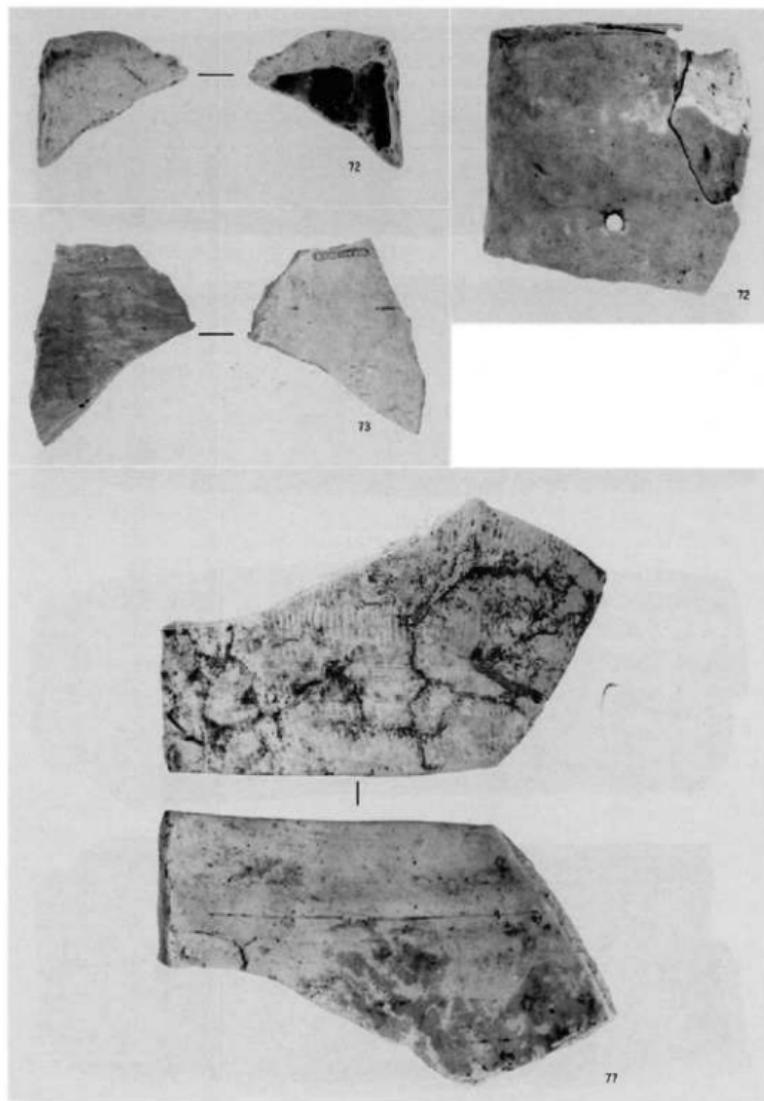
S X04出土遺物ヘラ記号(1)



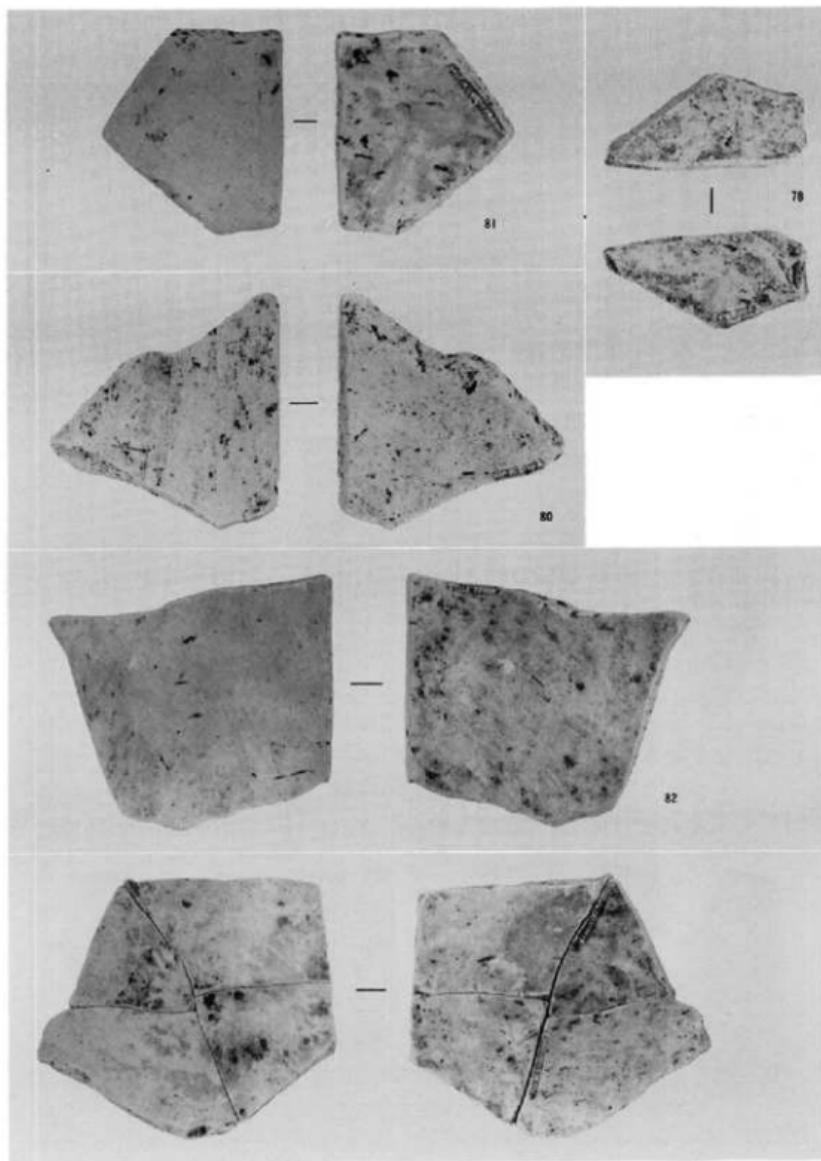
S X04出土遺物ヘラ記号(2)



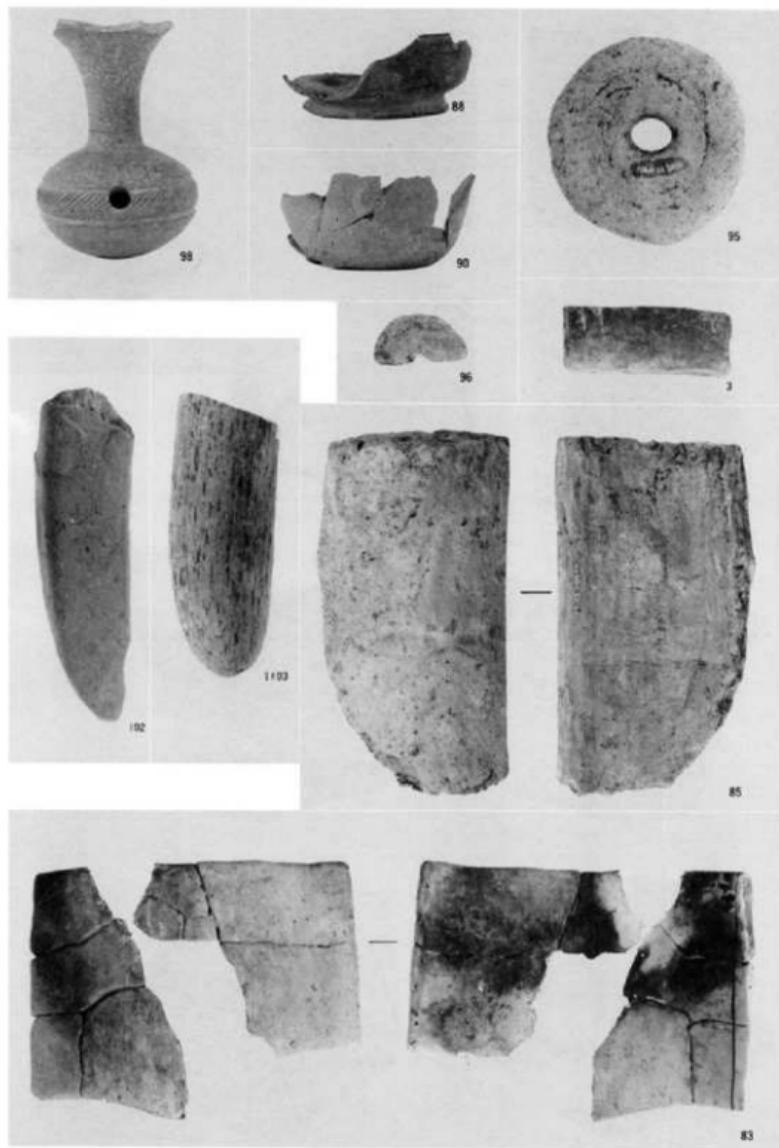
S K04出土軒瓦



S X04出玉瓦（瓦瓦、平瓦）



S X04出土瓦 (平心)



鄭州22次出土遺物 (88—檢出時 88—S D20 90—S D20)  
 (95—S D20 96—S D20 3—S X01 102—S K13)  
 (85—S D01 83—S X02)

---

# 那珂遺跡3

— 那珂遺跡群第22次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第253集

平成3年3月15日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 (株)ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈1丁目122-4

---